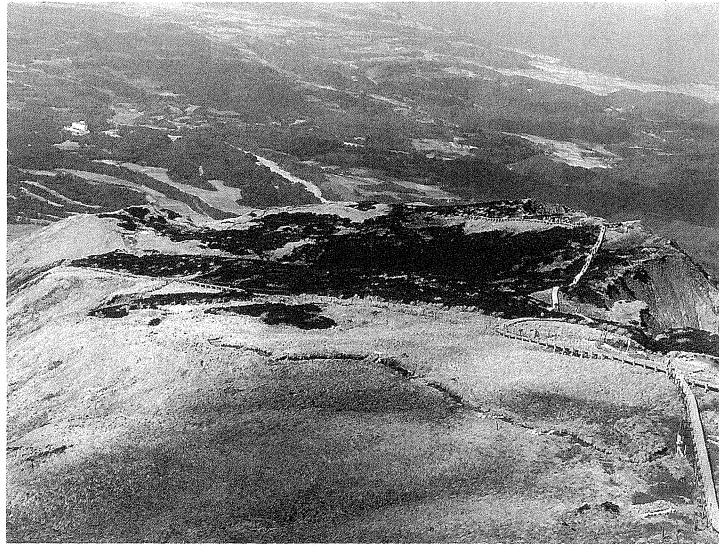


た。そして、その保全が営林署、環境庁、学識経験者、保護団体、多くのボランティア等により進められてきた。また、キャラボク林の保護のため、木道が設置され、現在はキャラボク群落を見下ろしながら山頂との往復が

できる。しかし、大山山頂がもろい地盤の上にあることは変わりなく、その崩壊は人間の手で止めることは不可能であろう。厳しい気候条件の中で、やがて滅びゆく運命の斜面にへばり

〈大山のキャラボク純林への交通案内〉
J/R米子駅から大山寺まで、日ノ丸バス、日交バス
大山寺（バス停博労座）から徒歩で大山山頂へ約4.5km



大山山頂上空より撮影。後方に日本海が広がる

大山のキャラボクとともに鳥取県を代表する文化財は三仏寺奥院である。三仏寺のある三徳山は、やはり、修験者の山として知られるところである。寺伝では、慶雲三年（七〇六）役行者の来山が伝えられ、ついで、嘉祥二年（八四九）の慈覚大師による寺院建立が伝えられている。寺伝はともかくとして、やがて、天台密教と結ばれて山岳仏教の発展をみる。中・近世においては、武家の崇敬を集めてきた。

この三徳山関係だけで、指定文化財の件数は二十件を数えるが、特に、三徳山自体が山岳仏教史跡として名勝及び史跡に指定されて

役行者伝説の投入堂

ついて頑張っているキャラボクが人為的な原因で減退することだけは避けねばならない。また、キャラボク自体の更新システムについても、地元の鳥取大学において調査・研究が進められており、その保護対策等についても新たな方策が得られることが期待されている。この夏も多くの人でにぎわった大山山頂であるが、片手に石を持った登山者の姿が目立ったことをつけ加えておく。（「木一石運動」として、登山者に山頂保全事業の材となる麗の石を持って登ってもらうことを呼びかけている。）

ご存じですか？ こんな文化財——④

（鳥取県）

大山の キャラボク純林

特別天然
記念物

三仏寺奥院

国 宝

日本最大のキャラボク群落
標高一千七百十一mの大山は中国地方の最高峰、大山隠岐国立公園に指定され、年間を通して約二百万人以上の観光客、登山者、スキー客でにぎわう。その大山山頂近くに広がるのが特別天然記念物のキャラボク群落である。

キャラボクはイチイの変種と考えられるが、縦に伸び大木となるイチイと異なり、広く横に枝を張る低木である。大山山頂のものは推定樹齢五百〜六百年に至るものも少なくない。北西の季節風と、約半年間雪に覆われる大山山頂という厳しい気候条件の中で六百年も成育していることに驚かされる。

キャラボクは鳥海山（秋田県、山形県）を北限として、東北地方から日本海沿岸の高地に分布し、大山の群落はほぼ南西限にあたる。また、約八ヘクタールの群落は日本最大であり、昭和二年（一九二七）には天然記念物に指定され、さらに昭和二十七年（一九五二）特別天然記念物に指定された。

六百年も風雪に耐えてきたキャラボク林であるが、その周辺環境

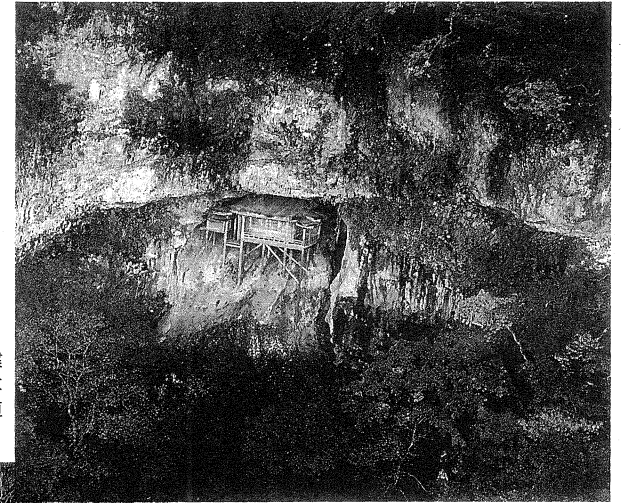


大山のキャラボク純林指定地全景。
尾根づたいに白く伸びているのが木道

写真提供／鳥取県教育文化財団（2点とも）

には変化が見られる。大山山頂の崩壊がそれである。大山山頂自体が非常にもろい地盤であることに加え、登山者の踏みつけ等により侵食が進行し、崖崩れが発生するようになり

断崖絶壁に巖窟を掘り、堂を建築している様子がわかる。右はヘリコプターより、下は登山道終点より臨む



写真提供／鳥取県教育文化財団



写真提供／柏原賢司

〈三仏寺奥院への交通案内〉
JR倉吉駅から日ノ丸バスにて三徳山下車
バス停三徳山より徒歩約1km

いる。そして、その指定地内に建つほとんどの建造物、そこに収蔵されている多くの美術工芸品が国宝・重要文化財、県・町の有形文化財に指定されている。

三仏寺奥院は国宝に指定されている。別称の投入堂とは、役行者が断崖絶壁の巖窟にこの堂を法力をもつて投げ入れたという伝説に由来するという。堂は急傾斜の岩盤から懸造でたつ流造、檜皮葺の建物で、正面と西側に縁がつく。流造の側面には縄^{なづな}屋根の庇をつけ、さらに隅には一段低く庇をつけて変化に富んだ美しい屋根をみせている。また、東庇の軒下には方一間の切妻造の小さな祠、愛染堂^{あいせんどう}を造って全体のバランスをとっている。さらに、この奥院の最も特筆すべきは、その足周りにある。身舎の丸柱や庇の面取り角柱をそのまま床下に延ばして急斜面の岩上に巧みに乗せて堂をささえている。その最も長いものは堂高の一・五倍にも達する。

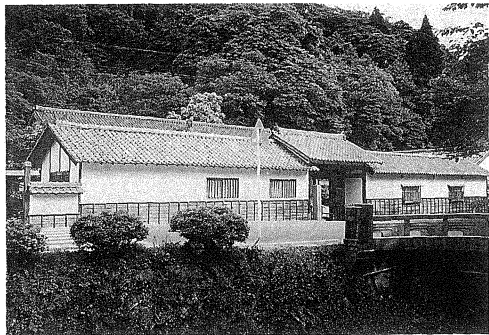
この平安時代後期頃の建築と推定される美しい堂の内部には、本尊として木造蔵王権現像が一体、その脇にさらに六体の木造蔵王権現像が祀られていた。これらの像は重要文化財に指定されており、三仏寺本堂下の宝物殿で見学することができる。

（鳥取県教育委員会文化課

文化財主事 中林範明）

島根県

石見銀山代官所跡（表門）



重要文化財

石見銀山遺跡 神庭荒神谷遺跡 出土品

後世に残そう
我が県の文化財 24

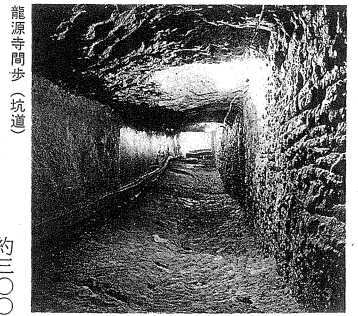
〔史跡 石見銀山遺跡〕
石見銀山は、東西に細長い島根県の中央部の大田市からおよそ一五キロメートル山間に入った、大田市大森町を中心に所在する。

石見銀山は日本を代表する鉱山であり、大永六年（一五二六）に博多の豪商神谷寿貞により本格的に開発されたという。その最盛期は戦国時代後半から江戸時代初期にかけてであり、大内、尼子、毛利氏などの戦国大名の争奪の的となり、永禄五年（一五六二）に、毛利元就が完全に掌握すると、横出し港を温泉津（邇摩郡温泉津町）に置き、一体的経営を行い、戦力源としていった。天正一二年（一五八四）からは毛利氏と豊臣秀吉とで共同

- 石見銀山遺跡へはJR大田市駅から川本行きのバスで20分。資料等は石見銀山資料館で見ることができる。付近には大森銀山町並み保存地区があり、町並み交流センターでは資料や映像も見ることができる。問い合わせは石見銀山資料館（☎08548-9-0846）へ。
- 神庭荒神谷遺跡へはJR庄原駅から車で約15分。出土品は、レプリカを島根県立風土記の丘資料館・島根県立埋蔵文化財調査センターで公開。平成9年度は東京・大阪・島根の三会場で行われる「古代出雲文化展」でも公開される。問い合わせは古代出雲文化展実行委員会事務局（☎0852-36-8523）へ。

経営を行い、江戸時代に入ると周囲のおよそ一五〇村を併せて石見銀山御料（天領）となり、初代奉行の大久保長安が就任すると銀産出量は飛躍的に増大した。一六世紀後半から一七世紀にかけてポルトガルの東洋貿易を支えていたのは日本銀であり、一七世紀前半の石見銀山の産出量は年間約四、〇〇〇〜一万貫（三八トン）と推定され、その時期には世界の産出量の約三分の一を占めていたと考えられる。しかし、石見銀山の繁栄も寛永年間以降は坑道が深くなり、湧水処理に経費がかさみ、享保年間（一七一六〜三六）以後、産出量は急速に減少し、幕末には五〇貫を超すことはなく、経営は著しく困難となった。明治時代になると大阪の藤田組により黄銅鉱を中心とした採掘が行われたが、大正一二年（一九一三）に閉山となった。

石見銀山遺跡は大森町を中心に広範囲に分布しており、一四カ所の国指定史跡、一〇カ所と二基の県指定史跡、四カ所の市指定史跡を含む大規模遺跡である。主なものには坑道（間歩）で、三〇〇以上確認されている。坑道としては七カ所が国指定であり、その中の龍源寺間歩は坑口に四ツ留（木組）が復元され、一部通り抜けができる。また、坑道以外には銀山争奪戦の舞台となった山吹城跡、代官所



龍源寺間歩（坑道）

跡（現在は石見銀山資料館となっている）、奉行や代官の墓所、町年寄や地役人などの遺宅も指定されている。なお、銀山の山内は「正保二年（一六四五）石見国絵図」によれば、東西二・二キロメートル、南北二・五キロメートルの柵囲となっており、その内部の面積は約三〇〇ヘクタールに及び、未指定の精錬所跡などの生産遺跡や近世の寺社跡が多く残る。さらに、江戸時代以来の町屋集落である大森の町並みは、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、保存と活性化が図られつつある。

発掘調査は、遺構の遺存状況を確認し、保存・整備の資料を得ることを目的に、昭和五九年度から大田市教育委員会により継続されてきた。対象遺跡としては大森の代官所跡・向陣屋跡や銀山方役人の河島家遺宅、銀山の蔵泉寺口番所跡や龍源寺間歩四ツ留役所跡、山吹城山麓の上市場地区や大龍寺谷地区および下屋敷地区などであり、戦国から江戸時代にかけての良好な遺構や陶磁器をはじめとする多量の遺物が発見されている。たとえば下河原吹屋跡では、一七世紀前半の間口六間×奥行一〇間の礎石建物跡が検出され、鉾石を選鉱するときの摺り臼である要石が土間に埋められたり、水による比

重選鉾施設と推定される石積み施設の跡や炉跡などが確認され、付近からは大量のカラム（鉾さい）が出土し、銀の精錬所と判明した。また、下屋敷地区でも一七世紀前半に属する礎石建物跡の精錬所を検出しており、両者とも初代奉行大久保長安の頃の遺構と推定されている。

平成五年度からの発掘調査は銀山の山頂部分（標高五三七メートル）の石銀地区を対象としている。この地区は銀山の開発時から最盛時の拠点になった場所であり、遺跡の広さは二〇ヘクタールを測る。テラスも多くあり、精錬を行った建物跡や寺跡、池、井戸、墓地、坑道などが認められた。本年度からは島根県教育委員会も調査員を派遣し、本格的に発掘を実施している。これに呼応して、来年度からは発掘調査を中心に、大田市、瀬戸内市、津和野町、温泉津町を対象として考古学、歴史学、金属学、民俗学などの分野からの調査もスタートする。

最近、調査や町並み保存により、学際的価値や観光資源において再び注目されはじめています。また、一市二町にまたがる石見銀山遺跡の総合的調査が軌道にのるよう、地元や民間団体、研究者および行政機関が連携をとりだしつつある。これまでに、町づくりの一環として、大森町の全世帯が入る大森町文化財保存会による史跡清掃活動や大森小学校の石見銀山遺跡愛護少年団のふるさと学習など

の文化財愛護活動も継続してきている。このような状況下、石見銀山の史跡拡大と世界遺産をめざす期待も、また高まりつつある。

（島根県教育庁文化財課主幹 西尾克二）

重要文化財 神庭荒神谷遺跡出土品

神庭荒神谷遺跡は日本第六位の面積を持つ穴道湖を東に臨む、大森町大森の中央部に立地している。大量の青銅器群が出土した地点は、中国山地から北に向かって派生してくる細長い低丘陵の中に刻み込まれた開析谷の最奥部である。

遺跡が発見されたきっかけは、昭和五八年に島根県が、簸川南地区広域営農団地農道整備事業として穴道湖南部の丘陵地帯を東西に貫く農道建設を計画したことには始まる。この計画を受け、島根県教育委員会が遺跡の有無の分布調査を実施したところ、斐川町大字神庭字西谷の谷の最奥部で一片の須恵器片が採集された。この須恵器片の採集により要注意箇所としてマークされたこの場所は翌五九年の試験地点として選ばれたのである。

昭和五九年の発掘調査では三五八本の銅剣が弥生時代に整然と埋納されたままの位置で発見された。そして、翌年の夏には銅剣出土地点から東に七メートルの地点から銅鐸六口、銅矛一六本が出土したことは今だ記憶に新しい。

遺跡の埋納坑から出土した青銅器群は

の段階の製作とされる高さ二一・四～二三・八センチメートルの外縁鈕式五個で構成されている。

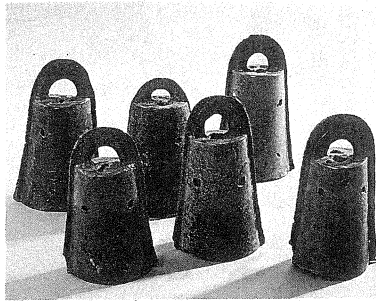
そして、平成八年一〇月一四日に神庭荒神谷遺跡から東南側の標高三一五メートルの大黒山、標高三一九メートルの高瀬山を挟んで直線で三・三キロメートルの地点にあたる加茂町岩倉字南ヶ廻の谷間に面する丘陵中腹から合計三十九個もの銅鐸が発見された。「加茂岩倉遺跡」と命名されたこの日本最多の銅鐸出土遺跡は神庭荒神谷遺跡の発掘に勝るとも劣らない衝撃を我々に与えたのであった。この遺跡は神庭荒神谷遺跡と共に弥生時代の青銅器祭祀の在り方や出雲地域の弥生社会を復元する上で貴重な資料になるものと考えられる。

神庭荒神谷遺跡から出土した銅剣は発掘された翌年の昭和六〇年六月に重要文化財に指定され、銅矛・銅剣についても昭和六二年六月に同じく重要文化財に指定されているが、保存処理等に長い年月がかかったため、一堂に公開する機会を持つことはできなかった。

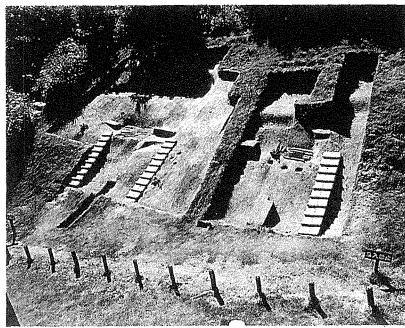
平成九年度はこの神庭荒神谷・加茂岩倉の青銅器群を含んだ古代出雲の歴史文化を紹介する展示会を東京、島根、大阪で開催するので、多くの方々の来訪を期待している。

（同課主事 岩橋孝典）

島根県



最古形式を含む出土銅鐸群



復元整備された現在の神庭荒神谷遺跡

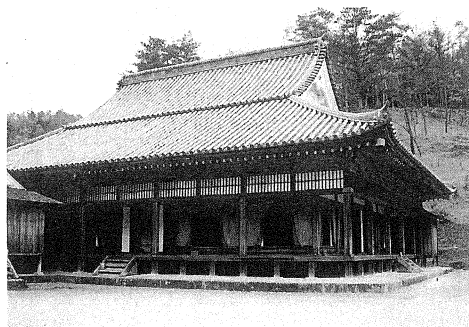
保存状態のよい個体もあったが、銅剣の一部などはブロンズ病に侵食され、劣化・破損の激しいものもあった。出土した青銅器を長期間そのまま放置はできないので、文化庁、東京国立文化財研究所、奈良国立文化財研究所の指導の下に財元興寺文化財研究所が保存処理・修理作業にあたることになり、昭和六一年から平成五年の足かけ九年にわたって保存処理の作業が行われた。神庭荒神谷遺跡から出土した銅剣三五八本は、それまでに国内で出土していた銅剣の総数（約三〇〇本）

を上回っているが、そのすべてが「中細形銅剣」と呼ばれる型式のみで構成されていることなどから、限定された生産地で短期間に大量生産されたものと考えられる。銅剣の大きさは全長約四八～五四センチメートルの間にまとまっており、重量は最も重いもので五六二グラムであるが、四〇〇～四五〇グラムのものが平均的である。

二次調査の際に出土した一六本の銅矛は中細形銅矛二本と中広形銅矛一四本に型式分類され、銅剣に比べると個体差が大きく、中細形銅矛は全長七〇センチメートル以下で、中広形銅矛は全長七二～八三センチメートルとなっている。現在のところ七本の銅矛に刃部の矢羽状研ぎ分けが見つかっているが、これと同様な例が銅矛の本場である北部九州の佐賀県検見谷遺跡・目達原遺跡などから出土した銅矛から発見されており、北部九州地域との強い関係がうかがわれる資料である。神庭荒神谷遺跡の出土品の組み合わせの中で人々を驚かせたのは、北部九州を中心とする地域で使用された武器形祭器と近畿を中心とする地域で使われた銅鐸形祭器が同じ遺跡で発見されたことである。特に銅鐸と銅矛が同一遺跡から出土したことは初めてであった。

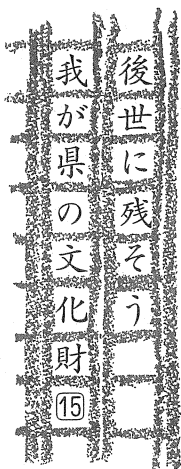
六個発掘された銅鐸は、形式的に最古の銅鐸とされる高さ二一・七センチメートルの菱環鈕式一個（五号鐸）とその次

岡山県



開谷学校

国宝 史跡 鬼城山 旧開谷学校講堂



- 旧開谷学校講堂へはJR山陽本線吉永駅、または国道2号線木谷から車で5分。詳しい問合せは下記へ。
特別史跡開谷学校顕彰保存会
(☎0869-67-1436)
- 鬼城山へはJR吉備線服部駅から車で5分。鬼城山から7キロ南にある吉備路風土記の丘にある吉備路郷土館で鬼城山の主要遺構の写真パネルを展示。詳しい問合せは下記へ。
総社市教育委員会文化財室
(☎0866-92-8363)

〈国宝 旧開谷学校講堂〉

備前岡山三代藩主池田光政は新しい学校建設予定地を探していた。寛文六年（一六六六）和氣郡木谷村を訪れ、閑静なこの地が藩の礎となる人間を育てる新しい学校の教育環境として極めてふさわしいと確信し、やがて壮大な学校の設立計画を立てた。

寛文一〇年、光政は学校奉行津田永忠にその建設を命じた。永忠は延宝三年（一六七五）にはこの開谷に住まいを移し、本格的に建設に携わった。

貞享年間（一六八七〜八八）に聖廟（孔子廟）と芳烈祠（現開谷神社）が完成した。続いて元禄一四年（一七〇一）には

学校の中心的建物である講堂（それ以前に仮講堂がつくられていた）が完成し、この頃には周囲を巡る石塀も築かれていた。

建設を始めてから三〇年余りの歳月を費やし、全国に例を見ない手間暇かけた質とスケールを誇るものであった。実にこの完成は光政が亡くなってから二〇年も過ぎてからであった。そもそも教育とはそのくらい先を見込んでなされるべきもののようである。

この学校の設立は全国各地の藩営郷学の中でも最も早く、わが国庶民教育史上特筆すべきものであった。庶民の子弟、家中武士の師弟、他領の者などが学んだ。庶民の子弟も過半は村役人や医師など上層庶民の子弟であったといわれている。

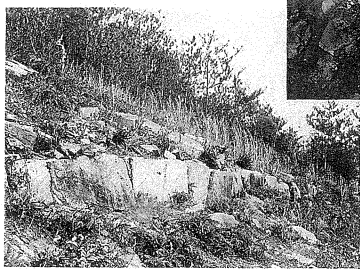
旧開谷学校講堂は昭和二十八年（一九五三）十一月一日付で国宝に指定されている。

講堂は、桁行一九・四メートル、梁間一五・六メートル、一重、入母屋造、本瓦葺で、備前焼の瓦を用いて、上下二段からなる鑑臺とする。高く積まれた大棟などとも併せて特色のある姿を示している。また、一枚ずつ微妙に異なる備前焼の色合いが集合になって一段と光彩を放

岡山県

七メートル、高さ六・七メートルばかり。それは、原則的には内外の基礎を石積によつて固めた両面築造法をとり、上半に版築状の土塁がとりつく構造である。外側石垣の積み方は一様でなく、方形の石材を用い縦に積み重ねた重箱積や、長石を使って横に線を揃えた布積のほか、小口より奥行の長い石材を束ねたように組

神籠石状外側列石



鬼城山・第1城門跡
(総社市教育委員会提供)



第3水門跡

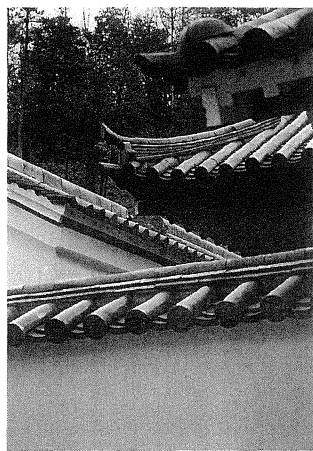
む一種の牛蒡積、あるいは階段積、または一段並列の神籠石状の構築法など様々で、築造に携わった集団の多様さを反映している。しかも城郭線を直線的なつくりを単位とし、結節点で必ず「折」を形成しながら、城外へあるいは城内へと走行しておよそ変七角形を形づくって帰結する。そこは傾斜変換点であるだけに、きわめて高度な技術が要求されたに違いない。

城壁が谷渡りする所には水門が構えられる。合計五か所を数えるうち、たとえば第二水門跡の構造は、こうである。まず、岩盤を削平して地形を整え、高さ一・七〜三・一メートル、長さ一六メートルにわたって、整齊・堅固な水門石垣を築き、谷川を遮断する。石垣の上には箱式石棺状の通水溝を設け、さらに上部三メートルほどをゆるぎない版築土塁で被覆する。他の水門跡も若干大小の差があるものの、よく似た形状といつてよい。対する城門は、推定箇所を含め三つが開口する。いずれも水門跡とかけ離れた、尾

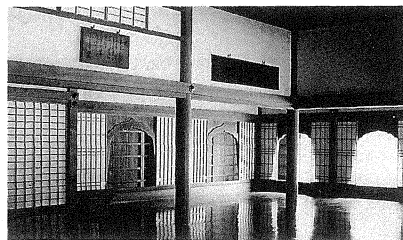
根筋の登頂道が城壁と交わる部位に所在する。南の防禦正面に開口する第一城門では、二石一対の見事な門礎が検出されて、強い関心をよんでいる。門礎の一つの大きさは一七〇×一三〇センチ、厚さ四二センチ程度。それぞれ両脇に、掘建柱に添える式の半円弧状の切り込みを有し、平滑に仕上げた上面に方立と扉軸受け孔が穿たれ、蹴放(段差)も刻まれて門扉が内開きであつたことも明らかとなつた。奥寄りに位置する二本の掘建柱とともに四本柱からなる城門は、間口三・四六メートル、奥行き二・七メートルの規模。その内側はさらに逆ハの字形に開き石組で固められる。また城内奥深くには、礎石総柱建物の倉庫跡が数棟分も見つかっている。桁行は三間のものも多く、他に五間、七間のものもある。しかし梁間はいずれも三間で、一間が二一〇センチすなわち唐尺の七尺等間に相当する点、注意を要する。

城中においては、七世紀中葉から八世紀にわたる各種須恵器・土師器・平瓦などが採集されているが、創築期については六六三年の白村江敗戦を契機としたものか否か、なお議論が分かれる。

(同課参事 葛原克人)



一枚一枚異なる色合いが味わい深い備前焼の瓦(関谷神社)



講堂内部

妻飾は前包み上に束を立てて虹梁を渡し、家紋首を組む。虹梁下、中央には形の良い臺股を飾っている。平面は桁行三間、梁間二間を身舎とし、その周囲に庇を巡らし、さらに吹放しの広縁が巡る形式とする。内部は一切の装飾を省いて、柱、長押などの木部は拭漆仕上げとする。磨き上げられた円柱と床が、木肌の深みと温かさをさらに演出している。唐様の美しい曲線をもつた花頭窓の明かり障子を通した光で鏡のように当時の輝きを放っている。屋根瓦下の地板上に土

を使用していないため、土埃が天井から舞い落ちない構造になっている。主材がクスノキなので、その薬効で蜘蛛も巣を張らないと言われていたが、実は屋根材のごく一部を除いてクスノキはほとんど用いておらず、ケヤキとヒノキが主である。

また関谷学校は、インカやアステカの石組みさきえと連想させるかのような、大きな石扉でどしりと取り囲まれていた。しかも広い校庭に縦横格子状に巡らされた暗渠設備による排水は完璧で、三〇〇年間はもちたえて冠水することはない。江戸時代の先進的土木工事のすごさをうかがい知ることが出来る。

この石扉は津田永忠が大坂から呼び寄せた河内屋治兵衛という石工の手になるものである。彼は田原井堰、石の懸樋を含めた田原用水、和意谷池田家墓所、百間川およびその荒手、山神の石巻、吉備津彦神社の類例を見ない大鳥居等を含めた県南部の数々の石造物を手掛け、岡山の石造文化の質的向上に果たした影響は計り知れない。

私たちはモノを見るときそのモノだけにとらわれてはいけない。そのモノの向こう側を見なければならぬ。その時そこに先人達の歴史や文化、そして何より

生活の息吹きや願望を垣間見ることができ、人間の英知の結晶として、文化財はそこに燦然と輝いているのである。

(岡山県教育庁文化課 課長代理 白井洋輔)

〈史跡 鬼城山〉

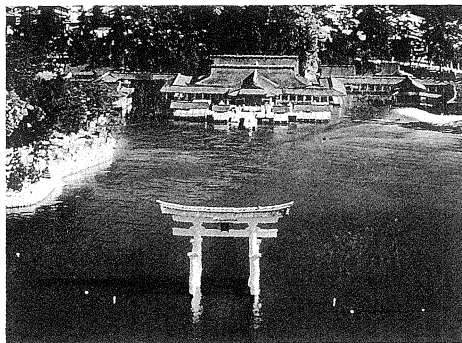
総社市奥坂に所在する鬼城山は、吉備高原の最南端に位置する標高およそ四〇〇メートルの峻嶒な山頂付近に城域を構えた、壮大な古代山城である。この地は眼下に吉備津を見おろすことができるばかりか、また遠く四国の屋島台地や五剣山の山並みを望むことも可能な、瀬戸内航路の要衝にあたる。

謎の山城の解明はようやく一九七八年、鬼ノ城学術調査団(団長 坪井清足)が組織されたことに始まり、その後、環境整備を前提とした発掘調査が継続されている。

鬼城山の山塊そのものは四周が絶壁をなす天険の要害で、その山頂近い八〇九合目あたりを、山腹を縫い谷筋を渡り尾根を切断して伸び連なる城壁が、準平原地形の頂部と五つの谷を抱いて鉢巻状に結ばれる。城壁の全周は二・八キロメートル、城内面積約三〇万平方メートルに及ぶ。雄大な城壁は、平均的にいつて幅

広島県

海側から見た大鳥居と厳島神社



国 宝 厳島神社 史 跡 原爆ドーム



〈国宝 厳島神社〉

厳島は、広島市街地の西南約一五キロメートルにある。島の主峰である瀨山に對する崇敬は、「神のいつき祀る島」として島全体を聖地視するに至り、それが厳島神社の起源であろうと考えられる。ことさら島上を避け、海浜から海上にかけて社殿位置を選定し、満潮時には海中に浮かぶがごとくに築造するという、木造建造物群として世界に類を見ない独特の景観も、島を聖視したことの結果と考えることができる。

また、厳島神社の建物配置上の特色としては、本社周辺の丘陵上に五重塔や多

- 厳島神社へは、ＪＲ山陽本線宮島口駅下車、宮島口から宮島連絡船で約10分、宮島棧橋から徒歩約10分。
詳しい問い合わせは、宮島町教育委員会（☎0829-44-2086）へ。
- 原爆ドームへは、ＪＲ山陽本線広島駅下車、広島駅からは市内電車で約20分。原爆ドーム前下車。
詳しい問い合わせは、広島市教育委員会文化課（☎082-245-2111）へ。

宝塔など仏教的な建造物を残していることがあげられる。平安時代から江戸時代に至る長い間、日本では神仏習合が行われていたが、その様相をよく示す数少ない神社の一つである。

現在残る建物は五〇棟を越えるが、うち二〇件が国宝及び重要文化財に指定されている。

厳島神社が歴史に登場するのは、弘仁二年（八一二）であるが、現在のような広大な社殿群を構成するようになったのは、平安時代の末期、安芸国守に任じられた平清盛の信仰と庇護を受けるようになってからである。仁安三年（一一六八）神主佐伯景弘によって大規模な造営工事が行われた。この時の工事の全貌については、その翌年に景弘が提出した報告によって明らかである。景弘は本宮の分三七棟、対岸の外宮の分一九棟、ほかに屏、垣や鳥居など合わせて六三件を完成し、同時に神殿以外の建物が板葺であったのを檜皮葺とし、社殿の規模を大きくしたと述べている。

この仁安造営後の大規模な工事は、貞応二年（一二二三）の火災後の再建が仁治二年（一二四一）に完成したものである。このほかにも失火や災害等に伴って

広島県

物も開かれた。当時の広島には、まだ洋式建物は少なく、大規模なヨーロッパ風の建築デザインによる物産陳列館のような建物は極めて珍しく、川面に映る姿の美しさと相俟って、広島の名勝の一つに数えられた。

その後は、大正一〇年に広島県立商品陳列所、さらに昭和八年には広島県産業奨励館と改称された。

しかし、戦色が濃くなると、館内の展示も徐々に縮小され、昭和一九年三月には館の業務は廃止され、内務省中国四国土木出張所、広島県地方木材株式会社など役所や統制組合の事務所使用され



原爆ドーム

た。

そして、運命の昭和二〇年八月六日午前八時一五分、B29エノラ・ゲイから投下された一発の原子爆弾は約一四万人の尊い人命を奪うとともに、広島市街地の半径二キロメートルの範囲を廃墟化させた。産業奨励館も爆風と熱線を浴びて大破、全焼したが、奇跡的に倒壊を免れた。

戦後、荒涼たる廃墟の街のなかで、旧広島県産業奨励館は、あたかもその日の悲惨な状況を象徴するように立ち残ったが、この建物の頂上円蓋の形状から、いつからともなく、市民の間から「原爆ドーム」と呼ばれるようになった。

昭和二年頃から中島町北部を中心に戦災記念公園建設構想の提案がなされ、原爆ドームを平和公園の基軸上の頂点に据えた平和記念公園が昭和三〇年に完成した。

昭和三〇年代後半、建物の風化が進み、自然崩壊の危険にさらされた時、ドーム保存の声は急速な高まりを見せ、こうした世論の中で昭和四一年七月、広島市議会は「原爆ドーム保存」を満場一致で決議し、撤去・保存論議に終止符を打った。これを受けて保存のための保存募金運動が行われ、募金をもとに昭和四二年に第

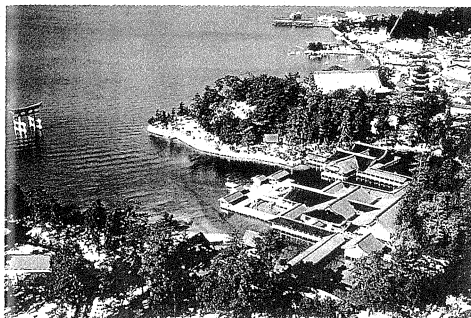
一回目の保存工事が行われた。

被爆後二年を経過したドームは、経年の風雪でレンガの各所に亀裂や剥落を生じていたが、エポキシ樹脂を使用した接着工法や鉄骨補強により修理された。この保存工から二〇年を経て、ドーム壁面の新たな亀裂や鉄骨の腐食が見つかり、平成元年から二年にかけて再び保存工事を実施した。

戦後五一年を経た今日、広島市街はたくましく復興し、高層ビルが林立する。原爆の傷跡を残すものは、都市化の波に押し流され、一つひとつ姿を消していつていく。しかし、元安橋の河畔にある原爆ドームはあの日と同じ姿で核戦争の恐怖を物語る生き証人として無言のうちに恒久平和を訴え続けている。

平成七年九月末、日本政府は世界に類を見ない、海面に張り出す木造建造物の厳島神社と、人類史上初の原爆被害の惨状を伝える遺跡である原爆ドームを、ユネスコに対し、世界遺産へ推薦した。本年一二月の世界遺産一覧表への記載に期待が高まっている。

(広島県教育委員会文化課
課長補佐 向田裕始)



彌山より望む厳島神社の全景



本社本殿



紺碧の水面に朱塗りの柱が映える

本社、客神社とも切妻造の前後の屋根を庇上に延長した両流造という形式をもつ。神座のある身舎の部分の床を高くして前面を開放し、背面中央に板扉を開くなどの特色がある。本殿の前に並行して横長の拝殿が建ち、間を小さな幣殿で繋いでいる。さらにその前に妻入の祓殿が

しばしば部分的な造営や修理がくりかえされている。現在の社殿は基本的には仁治年間に再建されたもので、鎌倉時代のものであるが、その規模形式は平安末期の状況を伝えている。本社本殿は元龜二年(一五七二)の造営であり、また、客神社本殿と拝殿には室町時代の補修の手が加わり、廻廊は永禄六年から慶長七年にかけて修造されたものである。

さて、今日に残る社殿は、本社の建築群が北面、摂社、客神社が西面して建ち、二つの神社の間と海岸を廻廊でつなぎ、諸社殿を配した結構は平安時代の寝殿造を想起させる。

〈史跡 原爆ドーム〉

(旧広島県産業奨励館)

水の都広島市街地の中央部にある原爆ドームは、人類史上初の原爆被害の惨状を伝える遺跡である。

建物は、大正四年四月に広島県物産陳列館として元安川の東岸に建築された。設計者はチェコ人のヤン・レツルである。建物は、一部鉄骨を用いた煉瓦造の建築である。全体に窓の多い三階建て、正面中央部の階段室は五階建てとなり、その上には銅板の楕円形ドームが載せられていた。大正四年八月に開館した館内では物産展のみならず、美術展など多彩な催し

ある。祓殿もまた特色のある建物であって、建具を全くもたず、入母屋造の妻側の庇を一段切り上げて、妻入の正面を強調している。かつては舞殿と呼ばれたが、本社の場合、舞殿の役割はこれの前に設けられた高舞台に移され、祓殿としての役割がこの建物に残ったのであろう。

総じて厳島神社の社殿は仁安三年造営時の姿を意識的に残そうとしており、後世の再建や改修に当たっても、伝統的な形式や意匠を重んじた結果が現在の姿にあらわれているようである。

山口県



秋吉洞の洞口

特別天然
記念物
国 宝

秋芳洞 秋吉台 紙本墨画淡彩 四季山水図



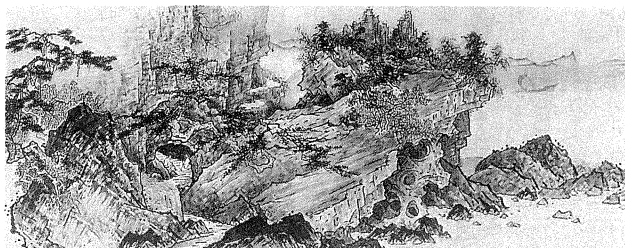
○秋吉台へは、山陽本線小郡駅よりバスで40分。または山口線山口駅よりバスで40分。秋吉台国定公園にも指定されており、四季を通して秋芳洞、大正洞などの石灰洞を観賞できる。より深く研究されたい方は、秋吉台科学博物館／☎08376-2-0640 入館無料 年末年始を除いて無休
○国宝「四季山水図」は、毛利博物館所蔵。毎年秋の「国宝展」で公開される。詳しい問合せは下記へ。
毛利博物館／☎0835-22-0001 9:00～16:30 月曜休館 山陽本線防府駅からバス「毛利邸」下車徒歩6分。

▽特別天然記念物 秋芳洞 秋吉台

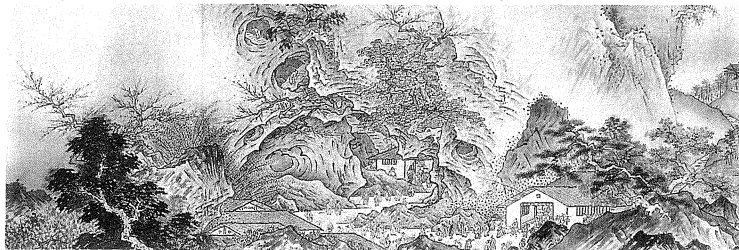
世界の地表面を形成する岩石のおよそ七％は石灰岩からできているといわれ、その分布地域には、カルスト地形とよばれる（旧ユーゴスラビアのカルスト地方にちなむ）独特の溶食地形の発達が見られる。山口県のほぼ中央部に位置する秋吉台は日本で最も広大なカルスト台地として有名で、日本列島の形成に関する学術上の重要性のみならず、有数の観光地として知られている。秋芳洞は昭和二十七年に、秋吉台は昭和三十九年にそれぞれ特別天然記念物として指定されている。

秋吉石灰岩は最近のプレートテクトニクス理論によれば、古太平洋の海底火山の頂上に形成された生物礁の複合体であり、これが海洋プレートにのって北に移動し、ユーラシアプレートに衝突・崩壊さらには沈み込む過程で大陸の古い地質体に付加したものと考えられている。今から三億数千万から二億数千万年前のことである。地上地形としての秋吉台上には、溶食によってできた大小さまざまな凹地が発達し、その規模や形状から、ドリーネ、ウバーレ、ポリエなどと呼ばれている。台上に河川は見られず、降水はアヴァンを通じて地下に流入している。

山口県



市でにぎわう秋の山中の情景



奥行きのある画面構成

文明元年（一四六九）の帰朝後は、九州に在住したほか、再び山口に移り同地、天竺に雲谷庵を結んで作画に取り組んだ。「山水長巻」は、文明一八年（一八四六）この雲谷庵で描かれたもので、巻末にあ

影響を及ぼしたといわれる。

文明元年（一四六九）の帰朝後は、九

州に在住したほか、再び山口に移り同地、天竺に雲谷庵を結んで作画に取り組んだ。

「山水長巻」は、文明一八年（一八四六）

この雲谷庵で描かれたもので、巻末にあ

これらは毎年秋季に一度公開されるのみであるが、公開時には長大な展示ケースを使って正副二巻全体を上下に並べて展示されるため、雪舟芸術の世界を心行くまで鑑賞できる趣向となっている。

（同文化財専門員 山田 稔）

このほか「山水長巻」には、附指定と

して、成化五年の年紀がある徐璉筆「紙

本墨書送雪舟帰国誌並序」一幅と、副本

として伝雲谷等顔筆「紙本墨画淡彩四季

山水図」一巻が備わる。

これは毎年秋季に一度公開されるの

みであるが、公開時には長大な展示ケー

スを使って正副二巻全体を上下に並べて

展示されるため、雪舟芸術の世界を心行

くまで鑑賞できる趣向となっている。

（同文化財専門員 山田 稔）

これは毎年秋季に一度公開されるの

みであるが、公開時には長大な展示ケー

スを使って正副二巻全体を上下に並べて

展示されるため、雪舟芸術の世界を心行

くまで鑑賞できる趣向となっている。

（同文化財専門員 山田 稔）

これは毎年秋季に一度公開されるの

みであるが、公開時には長大な展示ケー

スを使って正副二巻全体を上下に並べて

展示されるため、雪舟芸術の世界を心行

くまで鑑賞できる趣向となっている。

（同文化財専門員 山田 稔）

これは毎年秋季に一度公開されるの

みであるが、公開時には長大な展示ケー

スを使って正副二巻全体を上下に並べて

展示されるため、雪舟芸術の世界を心行

くまで鑑賞できる趣向となっている。

（同文化財専門員 山田 稔）

これは毎年秋季に一度公開されるの

みであるが、公開時には長大な展示ケー

スを使って正副二巻全体を上下に並べて

展示されるため、雪舟芸術の世界を心行

くまで鑑賞できる趣向となっている。

（同文化財専門員 山田 稔）

これは毎年秋季に一度公開されるの

みであるが、公開時には長大な展示ケー

スを使って正副二巻全体を上下に並べて

展示されるため、雪舟芸術の世界を心行

くまで鑑賞できる趣向となっている。

（同文化財専門員 山田 稔）

これは毎年秋季に一度公開されるの

みであるが、公開時には長大な展示ケー

スを使って正副二巻全体を上下に並べて

展示されるため、雪舟芸術の世界を心行

くまで鑑賞できる趣向となっている。

（同文化財専門員 山田 稔）

これは毎年秋季に一度公開されるの

みであるが、公開時には長大な展示ケー

スを使って正副二巻全体を上下に並べて

展示されるため、雪舟芸術の世界を心行

くまで鑑賞できる趣向となっている。

（同文化財専門員 山田 稔）

これは毎年秋季に一度公開されるの

みであるが、公開時には長大な展示ケー

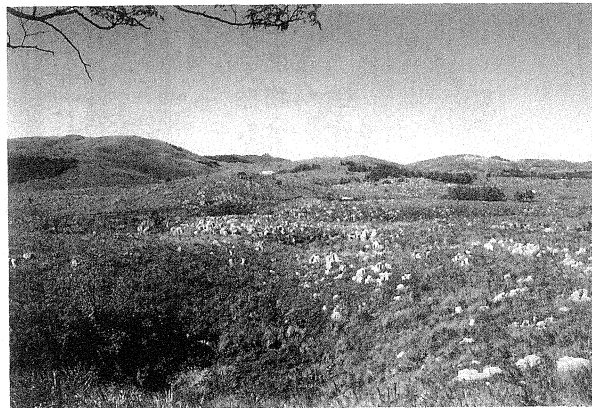
スを使って正副二巻全体を上下に並べて

展示されるため、雪舟芸術の世界を心行

くまで鑑賞できる趣向となっている。

（同文化財専門員 山田 稔）

秋吉台の展望



地上にはカッレン（石灰岩柱）が浸食によって一定の秩序をもって形成され、林立し、カッレンフェルトをなしている。秋吉石灰岩は緻密で硬く、カッレンは鋭利な形状を呈している。また、石灰岩からはフズリナ、サンゴ、碗足類などの化石が数多く産出し、これらをもとに秋吉台石灰岩が古生代石炭紀前期から二畳紀後期にかけて堆積したことがわかってい

る。特にフズリナは日本におけるフズリナ化石帯の標準地域とされており、化石の産出順序の精査により大規模な地層の逆転現象が認められている。毎年の山焼きにより樹木は後退し、カルスト景観が一望でき、多くの観光客を集めている。広大な草原は石灰岩の風化土壌の影響を強く受けて特有の植生をなしており、現在は代償植生としてのネザサススキ群落を主体としている。なお、台上の唯一の自然林である長者が森は、タブ群落からなる極相林である。

カルスト地形はまた、地下地形の発達に特色がある。秋芳洞をはじめ、二五〇以上の石灰洞群が知られており、洞窟学、地下水学などの研究者によって、多くの地下地形、地下水系などが明らかにされている。秋芳洞は、大正一五年、この地を皇太子時代に探勝された昭和天皇によって命名された延長一・五キロメートル、最大幅一〇メートルにおよぶわが国最大の石灰洞である。洞内には鍾乳石・石筍・石柱などの石灰生成物がたくさん見られる。「百枚皿」「千畳敷」「黄金柱」などと名付けられた生成物は自然の不思議な創造を目のあたりに見せてくれる。秋吉台に隣接して、大正洞・景清穴・中尾

洞などがあり、これらはいずれも国の天然記念物に指定されている。

（山口県教育委員会文化課 木橋悦二）

▽国宝 紙本墨画淡彩四季山水図

「山水長巻」の名で知られる本図は、画家雪舟の数多い作品のうち、特に代表的なものである。縦約四〇センチ、全長一五・九メートル。卷子装。全一巻。

わが国を代表する水墨画の名品として昭和六年（旧国宝）、ならびに昭和二六年に国宝に指定されている。

内容は、四季の山水の変化が巻を追って順次に展開され、春に始まり冬に終わっている。まさに詞なき山水の絵巻物というべきもので、山水風物がバランス良くかつ巧みに配置され、無限の変化を表現している。

画面は、一人の老士が、早春の山路に分け入る場面から始まる。老士の姿は、おそらく雪舟自身を暗示したものである。木立や岩陰に見えかくれしながら断続的に上っていく道は、雪舟の長い半生を表しているように思える。

やがて場面は初夏の情景から、色づく葦に秋の気配が漂う川辺の村へ、さらに大勢の人々でにぎわう秋の山里の市的情

ご存じですか？ こんな文化財②

(徳島県)

特別天然記念物 **加茂の大クス**

重要有形民俗文化財

祖谷のかずら橋

重要伝統的建造物群保存地区

脇町南町

千年の歴史を伝える大クス

傷を受けたり、木の周辺が駐車場となつたために、一時樹勢の衰えをみるに至つたりしたことがある。

そのため、昭和四十年に、周囲四〇アールの水田を購入して客土施肥を行った。さらに昭和四十五年冬には、空洞部のコンクリートによる補修や施肥が行われるなど様々な保存策を講じた結果、次第にその樹勢を回復した。現在もなお、旺盛な樹勢を保ち、クスの王者としての風格を高めている。

祖谷の蔓橋

天下の三大秘境の一つとして知られた祖谷地方の祖谷川にかかる「かずら橋」は、池田町より車で約一時間半のところに位置している。

この橋は、全長およそ四五メートル、幅は約一・五メートル、中央最垂部の水面よりの高さは約一五メートルである。

「かずら橋」はその名のとおり天然に育つたシラクチカズラを組み合わせて作つたもので、昔は対岸交通の重要なものとして、所々にかかれていた。

橋の数は明治末ごろまでは十三カ所あったが、大正十年（一九二一）前後には善徳に架つたかずらのつり橋一カ所を残し、針金のつり橋に変わってしまった。大正十二年、善徳でも針金のつり橋が架けられたため、かずら

の木は、本県における巨樹の中で最北の位置にあるものである。樹齢はおよそ一千年と推定せられ、その間幾多の風雪や災厄に耐え、その長い生命を誇るかのように、今日もなお古い歴史の跡を語り伝えている。大正十五年十月二十日に国の天然記念物に指定され、さらに昭和三十一年七月十九日に特別天然記念物に指定されている。

日本には、クスの巨樹は他にもあるが、それらがいずれも巨大さを誇るのに対し、加茂の大クスは、クスの典型的な樹相を保ち、壮麗な樹姿をしていることで知られている。

また、このクスは、かつて落雷によつて損

加茂の大クス

三加茂町の加茂一帯は、吉野川上流の南岸にある沖積地で、この大クスは、その中央、JR加茂駅からおよそ北東へ五百メートルの旧武神社の社地跡にその大きな樹冠を広げている。樹幹は、根廻り約二〇メートル、幹囲は約一三メートルで、地上三メートル付近から十数枝の太い枝を四方に広げている。

樹冠は、東西へおよそ四八メートル、南北に約四〇メートルの枝を張り、高さはおおよそ二五メートルでその姿はきわめて美しい。こ



日本三奇橋の一つかずら橋



のつり橋は一時途絶えていたが、昭和三年に復活された。以来三年ごとに、古例どおり架け替えており、最近では平成五年二月に架け替えが行われた。国の重要有形民俗文化財として昭和三十年二月三日に指定された。

橋の材料のシラクチカズラは、十一月下旬に村の人達の手により必要量の約三千五百キログラムを採集する。架け替え作業は、古橋落としが終わると、まず両岸の支点になるヨコ木を入れ、橋桁部にあたる敷綱を三〇センチ間隔に五本張る。また、カサ木とヨコ木の間にトリ木を二本たて（トリイという）、これ

から両側の欄干にあたるカベ綱を左右二本ずつ計四本張り、これと敷綱の左右両端をもつて綱でからげる。次に敷綱の上に約三センチ間隔に直径七センチ、長さ一・八メートルのサナ木を左右のカベ綱に関連してあみつける。それが終わると、両岸に二本ずつのフチ木をつり、最後に両岸の杉の大木から十二本の太い雲綱を垂らして両側のカベやサナギに結び付けて張る。このフチ木と雲綱で橋の重みは主として支えられ、揺れは緩和されるのである。

今でこそワイヤー等を入れて頑丈にしてあるために揺れも少なくなっているが、昔のものは風が吹けば横に揺れ、人が渡る時は上下に揺れたということで、よほどなれていなければ途中で立ち往生したとも言われている。

その様子は、阿波の民謡「祖谷の粉ひき節」の中にも歌われ、今に伝えられている。

この古い形態をもつかずらのつり橋は、新緑と紅葉の時期はもちろん、V字型に切れ込んだ深い溪谷美を誇る祖谷溪とともに四季を通じて多くの観光客を集めている。

脇町南町伝統的建造物群保存地区

脇町は徳島県の北部中央、吉野川に沿い、徳島市より約四十キロメートル西に位置する人口約二万人の山間の町である。徳島県を東西に走る撫養街道と、讃岐街道との交点に位置し、古くから交通の要衝として重要視され、中世後期に城下町として町が形成された。江戸時代の初期に城は廃されたが、その後は各種の商業で栄え、特に阿波藍や繭の集散地として北陸・九州・四国圏に名が知られる阿波西部の中心地として発展し、多くの商家が存在していた。

その古い繁栄期の商家の面影を伝えるものとして本瓦葺の屋根、重厚な塗籠壁、格子・虫籠窓として部戸等を持つ数多くの町屋がある。こうした町屋には、隣家との境の二階の壁面に「うだつ」と呼ばれる防火壁が至る所に残り、落ちついた歴史的町並みを形成している。

南町の歴史的町並みの保存事業は、昭和五

十年代の初めに行われた学術調査に端を発している。当時の調査結果は、歴史的価値を評価するとともに、町屋の朽損を指摘し、保存対策の必要性をせまるものであった。

昭和五十九年三月に発足した民間の「協町の文化を進める会」は話し合いの場であるフォーラムを展開し住民の意識の高揚に努めた。一方、町行政では昭和六十年に「うだつの町のホープ計画」を策定し、うだつの町の再生計画をはじめとした協町の町づくりを始めた。そうした中で、住民の間に町並みを保存し

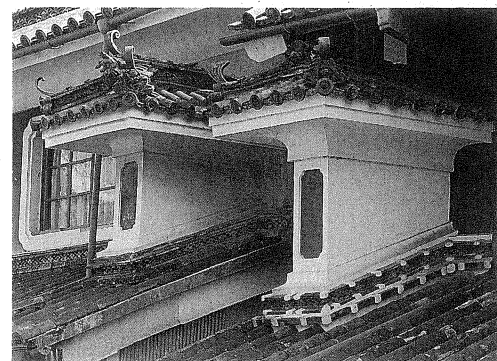


江戸の商家町を今に伝える

ていこうとする気運が芽ばえ、昭和六十一年六月には「南町並み保存会」が結成された（この南町は、東西に四三〇メートル・道幅六メートルの町並みである。）

六十三年には町は市街地景観条例を制定し、景観形成地域として約七〇・六ヘクタールを定めたが、中でも船運を利用できるため富商が軒を並べて栄えた南町約五・三ヘクタールは、六十三年十二月に、全国で二十八番目の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

伝統的な主屋の形式は、切妻造・平入または入母屋造・平入・本瓦葺である。壁は厚い塗籠



うだつ

で白漆喰の重厚な造りとし、二階には虫籠窓をつけ下屋の両端に「うだつ」をあげている。

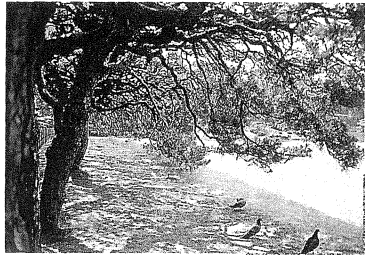
この「うだつ」は、二階の壁面から一メートル位突き出し、町家の意匠上大きな特色となっている。これを造るには相当な建築費を要したので、この防火壁を造れないことを「うだつが上がらない」と言ったもので、この言葉が今も一部で使われている。現在残っている「うだつ」は約五十個であるが、格子・虫籠窓と共に南町の景観に大きく寄与している。

建築年代の最も古いものは宝永四年（一七〇七）の棟札をもつ主屋で、通りに沿って並ぶ主屋の七割が伝統的建造物に特定されている。この地区では主屋・付属屋を含め八十八棟を伝統的建造物として保存を図っている。

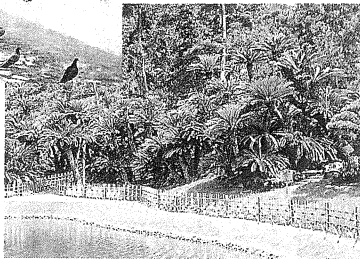
平成元年度から本格的に修理、修復事業が始まっており、古い町並みの特質とその価値を維持しながら、現在に生きる空間として再生されている。なお、平成六年度末で十八戸が修復を終えることになっている。

近年、整備が進むにつれて来訪客に公開して歴史的町並みの姿の学習の機会としたり、伝統的空間を体験してもらう等の利用がなされている。こうしたこともあって、近隣の町村はもとより県内外から散策を楽しむ観光客が増加している。

（県教育委員会文化課指導主事 木村佳代子）



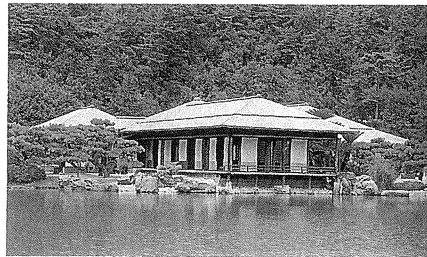
北湖・稻松



天然記念物「鳳尾扁」(ソテツ)

に造った大規模な庭園である。
この公園の庭園は、南庭と北庭に分かれている。南庭は、生駒氏が大茶屋と呼んだ別荘(今の掬月亭) 掬月とは中国唐の詩人于良史の「水を掬すれば(すくえば) 月手にあり」の一句をとったもので、棟の配置が北斗七星に似ていることから星斗館とも呼ばれた。を中心として南湖などの大きい池を掘り、島を造り、橋をかけ梅林や花畑を設けた回遊式庭園である。松平家では初代頼重のころ、今の

〈栗林公園〉
高松市栗林町1-1564-2
☎0878-33-7411 (栗林公園観光事務所)
JR高徳線栗林公園北口駅から徒歩5分
琴電琴平線栗林公園駅から徒歩10分



掬月亭

となり、一部荒廃したが、明治八年(一八七五) 三月県営の公園として公開された。その後明治四十四年に宮内省技師の設計により、北庭の大改修を行って、現在の北門が正門となった。
大正十一年(一九二二) に名勝の指定を受け、昭和五年(一九三〇) には栗林公園動物園が開園し、昭和二十四年(一九四九) には高松市美術館が建てられるなどして戦後は東門をまた正門に復した。(現在高松市立美術館は別の場所に移転している。)

その後文化財保護法制定により昭和二十八年(一九五三) に特別名勝に指定された。又、園内には、数多くの樹木(常緑・落葉針葉樹、常緑・落葉広葉樹など) があり香川県天然記念物に指定されたソテツ、カン、モガシ等貴重なものも多く、四季を通じて様々な植物が鑑賞できる。樹木・植物が豊富なことから鳥類も多く集まり、探鳥会も催されている。「栗林公園」の名前は、生駒氏の時代に築かれた「栗林荘」に由来している。江戸時代(松平家統治下) には北庭の栗林が存在したが、十九世紀半ばに栗林は鴨狩りに支障があるとして伐採され、今は数本を残すのみである。

〈国宝(工芸品) 金銅錫杖頭

J R 善通寺駅の西に総本山善通寺がある。

ご存じですか? こんな文化財⑮

(香川県)

特別名勝 栗林公園 国宝 金銅錫杖頭



栗林公園全景 (以下の写真提供は栗林公園観光事務所)

香川県は、四国の東北に位置し、瀬戸内海に面している。多数の島々が散在し、海岸部は瀬戸内海国立公園に属し、温暖で風光明媚な県である。昭和六十三年(一九八八) には、瀬戸大橋が開通し、四国の玄関口として重要な位置を占めている。県内には数多くの文化財が存在し、讃岐香川の歴史を語るうえで不可欠なものが多い。

〈特別名勝 栗林公園〉

特別名勝栗林公園は、J R 高松駅の南方約二・五km 紫雲山の東麓に位置する。総面積

七十五万㎡を有し、日本を代表する公園で、年間の入園者数も多い。栗林公園は現在平庭部分の面積が約二割で、それ以外は背後の山林である。

この公園の起こりは、元龜・天正年間(十六世紀後半) に当地の豪族佐藤氏によって西南区(小普陀付近) に築庭されたことに始まるといわれる。その後、寛永年間(十七世紀前半) に当時の高松藩主生駒高俊により南湖一帯が造園され、生駒氏が転封(二六四〇)された後は、常陸より入封した藩主松平頼重



芙蓉峰より北湖を望む



飛来峰より南湖全景を望む

(水戸藩主徳川光圀の兄に引き継がれ、以来松平家五代頼恭に至る百年余の間歴代藩主が修築を重ねて十八世紀前半に完成した。その後明治維新に至るまで松平家十一代の下屋敷として使用された。)

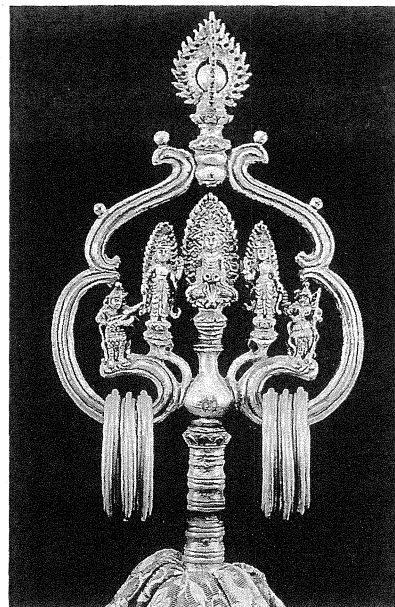
この公園の庭園は、わが国を代表する大名庭園といわれる。大名庭園とは、江戸時代の藩主が豊富な財力をもつて平地に池を掘り、水を流し、島を造り、橋をかけ、築山や丘を造り、道でそれらを連絡し、石をすえ樹木を植えるなどして四季の遊覧観賞に供するよう

この地は空海（弘法大師）の生誕地としても知られ、真言宗普通寺派の根本道場としてまた四国八十八か所七十五番札所として多くの参拝者を集めている。

ここ総本山普通寺には、国宝の金銅錫杖頭がある。錫杖は、僧が山野で修行する時、蛇や狼などを追い払い、人の門に立って門扉を手で打つかわりに鳴らす仏具である。この錫杖頭は、寺伝では空海が唐の仏教の師であった惠果より授かって持ち帰ったと伝えられている。（実際には、中国宋の時代に留学僧が持ち帰ったものらしいが、製作は唐の時代と考えられる。）この錫杖は、鑄銅製で全面に鍍金を施したもので、高さ二六・八cm、それに二八・二cmの柄をつけ、全長五五cmの手錫である。

錫杖は、大乘仏教においては、儀具として用いられ、この金銅錫杖頭もそうした儀具にふさわしく、優れた一品である。

この錫杖の頭部は精妙で、中央に舟形光背を持った上品上生の阿弥陀三尊とその左右に持国天、増長天の二天を配し、その裏面には下品下生の立像の阿弥陀を中心に両脇侍と広目天、多聞天の二天を配している。これら二天は表裏で四天王となり仏法を擁護することを意味している。これら表裏各五体の諸仏は、背中合わせに巧妙につながれていて、一連の鑄製であることがわかる。なかんずく、これらの諸仏は衣文・光背等を細かに表し、その卓越した鑄造技術がうかがわれる。輪頂には



金銅錫杖頭（写真提供／普通寺市教育委員会）

〈総本山普通寺〉
普通寺市普通寺町3-3-1
☎0877-62-0111
JR土讃線普通寺駅から徒歩25分、車で5分

四方を炎光で囲んだ宝珠や反花のある円形の塔があり、空輪には上端と中程と下端の先端にそれぞれ屈曲がある。上端の屈曲は中から外に曲がつて宝珠のある塔に接し、中程の屈曲は外から中に曲がつて四天王の頭部に接し、下端の屈曲は下から上に巻き上がった外に出て、脇侍の台座と四天王の足に接している。股間に銀が左右三銀ずつ合計六銀を飾る。この銀は、断面が四花形をなす珍しい銀である。

総本山普通寺では、この錫杖の音を聞く者は、罪が立ちどころに消え、請願成就するものとして深い信仰を寄せている。

錫杖は、早くからわが国へ伝来しているが、この金銅錫杖頭は形態・鑄造の方法に唐風のうかがわれる数少ない工芸品として貴重であり、わが国の金工技術にも影響を及ぼしたものと意義深いものである。

総本山普通寺には、このほか国宝の「一字一仏法華経序品」や重要文化財の「木造吉祥天立像」などや、県指定の史跡（普通寺旧境内）、天然記念物（大クス——この大クスは空海誕生時すでに繁茂していたといわれる）、土御門天皇の書跡、開祖空海（弘法大師）関係の遺品等数多くの文化財を所有している。

（香川県教育委員会文化行政課

文化財専門員 河原孝昭）

ご存じですか？ こんな文化財⑩

(愛媛県)

重要文化財
重文化財松山城
赤糸威鎧 大袖付 ほか

松山城(写真提供/松山市教育委員会)

〈重要文化財 松山城〉

「松山や秋より高き天守閣」正岡子規
この句で有名な松山城は、松山平野のほぼ中央部、道後温泉を見下ろす平山城で、賤ヶ岳七本槍の一人として武勲をたてた加藤嘉明が築城した。

嘉明は、秀吉に仕え天正十年(一五八二)の山崎の戦で明智光秀を破り、翌天正十一年の柴田勝家との賤ヶ岳の戦いや文禄の役(一五九二)一五九六の戦功によって、伊予国

正木(松前)城主に封ぜられた。その後、慶長の役、関ヶ原の戦と武勇を重ねて二十万石に加増された。嘉明は、この地方の実権を掌握するに伴い、正木城から現在の地に城を移転する計画を進め、慶長六年(一六〇二)に、家康から居城の移転の許可を得た。翌慶長七年に築城工事に着手し、時を同じくして城下町の建設にも力をそそいだ。

築城の構想は、松山平野のほぼ中央部、海抜約一三〇メートルの勝山山頂に、五層の天守閣を築造し、その周囲に櫓、門、堀を具備



二ノ門(写真提供/松山市観光課)

し、南西の山麓部に二ノ丸を構え、その下の山裾には濠をめぐらせた武家屋敷地(堀之内)を配し、北部、東部の山裾には出曲輪として北ノ郭、東ノ郭を備えるという壮大なものであった。

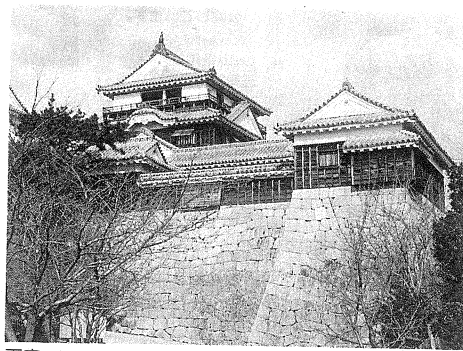
翌慶長八年には、家臣、正木の住民とともに居を新城下に移し、「松山」という地名を公にした。

松山城の築城は、普請奉行足立重信が指揮をし、嘉明が会津若松城主に転封された寛永四年(一六二七)までの二十六年間にそのほとんどが完成したが、一部の工事は次の城主蒲生忠知に引き継がれた。

寛永十二年(一六三五)に伊勢国桑名城主の松平定行が松山城主十五万石に封ぜられ、天守閣をはじめ門、堀、石垣などの改修を行った。五層の偉容を誇っていた天守閣は、この時三層に改築されたと伝えられる。

その後、城郭中核部の本壇と称された一帯に営まれた天守をはじめとする建造物群は、天明四年(一七八四)の落雷によりすべて焼失したが、嘉永五年(一八五二)までにすべて再建された。

現存する天守はこの時のもので、石垣内側の穴蔵を地階とし、上を三層三階とする。内部は、平和な時代を反映して住宅風の扱いが



天守

見られるが、外部は、破風や軒に反りを持たず、壁は下見板張りとし、塗りごめの格子窓、突き揚げ板戸、狭間を備えるなど、慶長期築城の面影をよく留めている。

本丸には、野原櫓などの築城当初の建造物、天守など天明四年焼失後の再建になる建造物など重要文化財建造物二十一棟が現存しており、往時の威容を今に伝えている。

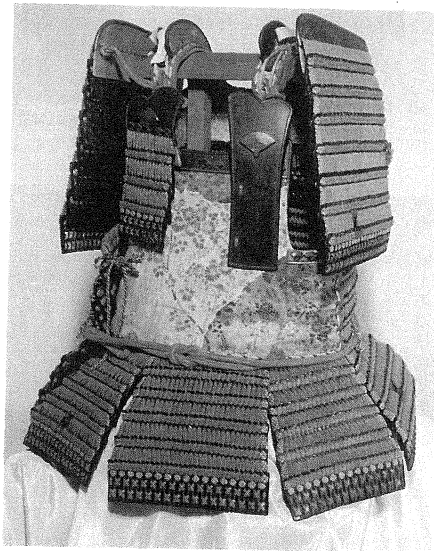
〈大山祇神社奉納品〉

瀬戸内海のほぼ中央部、今治市沖の芸予諸島の中心にある大三島に、古来日本総鎮守といわれる大山祇神社がある。

この地域は、陸地部が瀬戸内海に向かい大きく突出して中国地方に迫る狭い水道である。その昔、瀬戸内航路の船を

押え水軍が活躍する格好の場所であり、中央政局を左右するような大きな戦が行われた。

平安中期の藤原純友の乱から天正十三年(一五八五)に豊臣秀吉によって統一されるまでの間、瀬戸内海を舞台として源平合戦や南北朝の合戦など、数々の大規模な合戦があった。これら合戦の際には、大



赤糸威鎧

山祇神社に戦勝祈願や戦勝御礼の奉納品が数多く奉納され、現在に伝えられている。

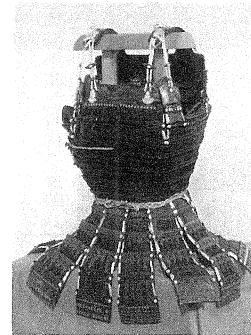
ここに紹介するのは、これらの一部である。源義経奉納「赤糸威鎧 大袖付」(国宝)

胴高三センチメートル、胴回り一七センチメートル、草摺高さ二三・五センチメートルである。一般の平小札よりやや狭小の黒漆塗りの鉄と革の平小札一枚まぜに茜染の赤糸で威し、耳糸、畦目は啄木、菱縫は紅猿轡で施してある。

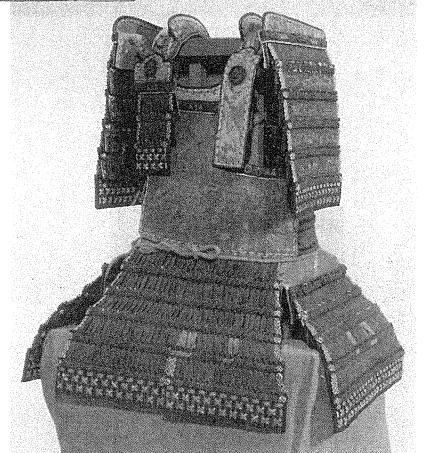
この鎧は、兜を欠失しているが、大袖、梅、檀、鳩尾板を具足し、綿嚙に障子板、背面に逆板、正面に弦走、韋があつて鎧の制を具備しているが、胴はひと続きで右脇で引き合わせ、

◎これらの文化財は大山祇神社にて公開しています。

〈大山祇神社〉
越智郡大三島町宮浦
☎0897-82-0032
広島県三原港より大三島フェリー、
井ノ口港下船バス8分
8:30~17:00 年中無休



紺糸裾素懸威胴丸



紫綾威鎧(写真提供／3件とも大山祇神社)

草摺が七間に分かれている。これは鎧と胴丸の特色を兼ね備えた特殊な形状の鎧である。
弦走章の枝菊小草文様、鏡地で鍍銀の覆輪の金具回り、臙銀地開き扇文の八双金物及び据文金物、押付の化粧板は松柳に騎馬武者文様の草摺草包み、梅檀、鳩尾板はともに片花先形である。

この種の鎧は、平治物語絵巻、後三年合戦絵詞に副將軍、副大將の着用する鎧として見られるが、遺品としてはこの一領が現存するのみである。

神社の記録では、源平の戦いに源義経が着用し、戦勝のお礼に奉納したものといわれている。

源頼朝奉納「紫綾威鎧大袖付」(国宝)
胴高六七・四センチメートル、胴回り九四・二センチメートル、大袖高さ四三センチメートル、同幅三〇・六センチメートル、鎌倉時代初期の作である。

胴は、黒漆塗りの幅広い平札で鉄と革を一枚まぜに横綴じしている。威毛は、麻布芯を紫地小葵文綾で包み、縄目は毛引きに威している。耳糸、畦目は啄木打ちの組糸、菱縫は紅染の猿轡が施してある。草摺は脇楯とも四

間五段下りで前後の裾板はおのの二間に分かれている。金具回り章所は樺入獅子花円文の染草で包み、化粧板等随所に鍍金地板、車輪文金物を打った大袖付きの鎧である。
総体に古風な様式を示し、平安時代の形式に近いが、形が端正な点など鎌倉時代の新風を感じさせる。

神社の記録では、源頼朝が奉納したものと

いわれている。

鶴姫着用「紺糸裾素懸威胴丸」(重文)

胴高三五センチメートル、胴回り七一・五センチメートル、草摺高三二・五センチメートル、盛上黒漆塗本小札を用い、胴は前立拳二段、後立拳三段、長側五段を紺糸で毛引に威している。草摺は同じ盛上黒漆塗本小札で素懸威とし、十一間に分けるなど普通の胴丸にはみられないめずらしい構造である。脇板は小型で小さく脇曳を威しつけて、肩上へは紐を結んでいる。胸の部分が大きく、腰は細く、婦人用に適している。大山祇神社の神主大祝安用の娘鶴姫が、天文十年(一五四二)大三島の合戦に着用したものといわれる。婦人用胴丸としてきわめて珍しい胴丸である。

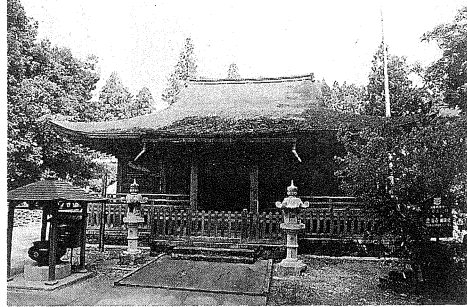
細い小札を用いているなど、室町時代末期の特徴がよく表れた作品である。

(愛媛県教育委員会文化財保護課専門員

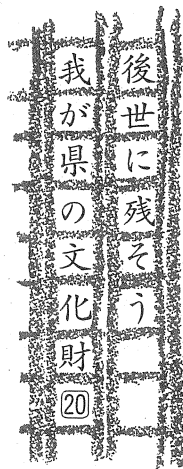
山内恵良)

高知県

豊楽寺薬師堂（国宝）



国 宝 豊楽寺薬師堂 特別天然記念物 土佐のオナガドリ



＜国宝＞ 豊楽寺薬師堂

豊楽寺は、徳島県境より一〇キロメートル、高知市へ四五キロメートルの四国のほぼ中央山岳地帯に位置（吉野川北岸の丘陵海拔約四〇〇メートルの南面）し、往昔は阿波讃岐に通う往還に近く建てられたものであろうが、今は国道三二号線から町道で三キロメートルはるかに登った、山の中腹に取り残されている。

豊楽寺は大田山大願院豊楽寺といい、行基の開創するところで、その草創は聖武天皇の神亀元年（七二四）と伝えられている。

また、別名柴折薬師とも称され、愛知

- 豊楽寺へは、JR土讃線大田口駅から徒歩30分、車で10分。
公開日は毎年旧暦2月15日、4月8日、7月6日。
詳しい問い合わせは、下記へ。
大豊町教育委員会 ☎0887-72-0450
- 土佐のオナガドリは、南国市篠原町の長尾鶏センター（☎0888-64-4931）で見ることができます。9:00～17:00、木曜定休、入場料は500円。
詳しい問い合わせは、下記へ。
南国市教育委員会 ☎0888-63-2111

県の鳳来寺の峰薬師、福島県の常福寺の嶽薬師と共に日本三大薬師の一つに数えられ、四国最古の建造物で、国宝に指定されており、四国の法隆寺とも敬われている。

薬師堂は豊楽寺の本堂であって、堂内に奉祀する釈迦如来像の胎内銘により、仁平元年（一一五一）に造られたことが明らかである。

その後、室町末期に至る長い期間の消息は明らかでない。元龜二年（一五七二）の大風で杉の巨木の下敷となって大破したので、天正二年（一五七四）に長宗我部元親がこれを修復した。ついで寛永一四年（一六三七）再び大風によって大破したが、土佐二代藩主山内忠義は直ちに修理を行い、新しく向拝を付加した。

向拝は一間で大面取りの角柱を建て、両端に木鼻を付けた虹梁を架け、柱の頂には和様の三斗組を置き、虹梁の中央には、山内家の定紋の三つ葉柏を透彫にした臺股を置いている。

本堂は、桁行、梁間ともに五間で、一重。屋根は、入母屋造、こけら葺、総素木造りの至極あつさりした堂宇である。

また、大陸の建築様式が、ようやく日本化しようとする時代に建設されたもの

高知県

オナガドリの起源の一般的伝承は、江戸時代前期藩主山内侯は、参勤交代の大名行列の際、先頭を切って進む槍輦の先

えた。
このような租税御免の政策により新町が形成されたので、後にこの町は御免町（後免町）と呼ばれ、近郷を経済圏にし栄えた。

原産地の南国市篠原は、高知空港からほど近い県の中央地区部に位置し、「年にお米が二度穫れる」とよさこい節で謳われた高知県随一の穀倉地帯である。

隣接の後免町は、江戸時代初期、移住して来る者が少なかったことから、藩は家屋敷二五代（一五〇坪）までは永代無年貢にするとか、紺屋、大工、鍛冶、樽屋等には御国役を免ずるとか種々の恩典を与えて、人々の集中を奨励した。

このように租税御免の政策により新町が形成されたので、後にこの町は御免町（後免町）と呼ばれ、近郷を経済圏にし栄えた。

オナガドリの起源の一般的伝承は、江戸時代前期藩主山内侯は、参勤交代の大名行列の際、先頭を切って進む槍輦の先

えた。
このように租税御免の政策により新町が形成されたので、後にこの町は御免町（後免町）と呼ばれ、近郷を経済圏にし栄えた。

オナガドリの起源の一般的伝承は、江戸時代前期藩主山内侯は、参勤交代の大名行列の際、先頭を切って進む槍輦の先

えた。
このように租税御免の政策により新町が形成されたので、後にこの町は御免町（後免町）と呼ばれ、近郷を経済圏にし栄えた。

オナガドリの起源の一般的伝承は、江戸時代前期藩主山内侯は、参勤交代の大名行列の際、先頭を切って進む槍輦の先

えた。
このように租税御免の政策により新町が形成されたので、後にこの町は御免町（後免町）と呼ばれ、近郷を経済圏にし栄えた。

オナガドリの起源の一般的伝承は、江戸時代前期藩主山内侯は、参勤交代の大名行列の際、先頭を切って進む槍輦の先

えた。
このように租税御免の政策により新町が形成されたので、後にこの町は御免町（後免町）と呼ばれ、近郷を経済圏にし栄えた。

オナガドリの起源の一般的伝承は、江戸時代前期藩主山内侯は、参勤交代の大名行列の際、先頭を切って進む槍輦の先

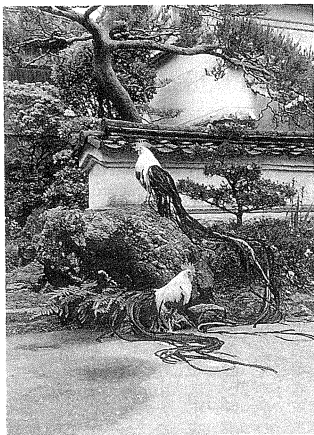
えた。
このように租税御免の政策により新町が形成されたので、後にこの町は御免町（後免町）と呼ばれ、近郷を経済圏にし栄えた。

オナガドリの起源の一般的伝承は、江戸時代前期藩主山内侯は、参勤交代の大名行列の際、先頭を切って進む槍輦の先

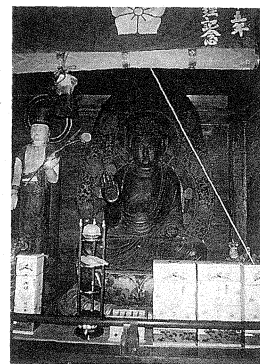
えた。
このように租税御免の政策により新町が形成されたので、後にこの町は御免町（後免町）と呼ばれ、近郷を経済圏にし栄えた。

オナガドリの起源の一般的伝承は、江戸時代前期藩主山内侯は、参勤交代の大名行列の際、先頭を切って進む槍輦の先

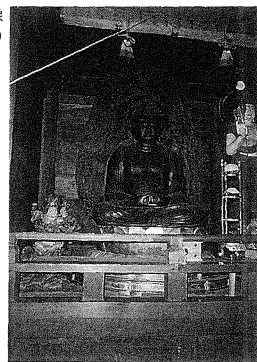
土佐のオナガドリ
(特別天然記念物)



木造薬師如来坐像 (重文)



木造釈迦如来坐像 (重文)



であるから、随所に日本的なものがうかがわれる。
床を張り縁を廻し屋根を緩い勾配のこけら葺とすることや、垂木の深い軒、美しい曲線の軒反、深く入った小さい入母屋屋根の妻飾は、平安時代の特色を現し、全体はまさに鳳凰の飛翔する形に似て優雅であって、落ちつ

きを感じさせてくれている。

なお、内々陣の棟縁天井は、日本におけるこの種の天井の最も古いものの一つと言われている。

安置されている木造薬師如来坐像、木造阿弥陀如来坐像、木造釈迦如来坐像の三尊は、明治四十四年四月指定の重要文化財となっており高知県の彫刻の中で最も重要な位置を占めている。

このうちでも最も古い様式を示しているのが釈迦如来坐像（ヒノキ材、仏身一三四・八センチメートル）である。

本像の胎内背部一面に、結願者の氏名と年記と薬師堂及び本像の造立のことが記されており、薬師堂建立の時代が明確となっている。

像はややずんぐりとし、頸は猫背の肩におちこむように作られ、顎を前に突き出して、螺旋も大粒で面相もやや面長な顔付きにつくられ、唇は前にとび出している。

像の後には古様な板光背が付属しているが、板光背をもつ像は古様な作風を保つ像が多いといわれていて、本像の技法も極めて古いものをもっている。

頭と体を一材より作り、前後に割り、内割りを施し、彫眼漆塗りであり、土佐の仏像の製作年代を明らかにする基準作

を飾る大鳥毛（飛鳥）に使用する長い立派な鶏の尾を、献上するよう藩内の農民に奨励した。

農民たちは、鶏の尾羽の良いものを作り出そうと競いあつたが、満足の得られるものはなかなかできなかった。明暦年間の頃、篠原の住人武市利右衛門が苦心改良の結果みことなオナガドリを作り出すことに成功した。

これがオナガドリの原種「白藤種」の始まりである。伝説では地鶏とキジや山鳥と交配して作つたとなつてはいるが、正確な記録がないため、よくわからない面がある。

その後多数の愛鶏家によって絶えず研究改良され、換羽期になつても尾翼は換羽しないで死ぬまで伸び、よく伸びた尾は一〇メートル余にも達するようになった。

明治初年に白藤種と東天紅とを交配させて作り出されたといわれている「褐色種」、さらに同二〇年頃、輸入されてきた白色レグホンとの間で、「白色種」が作り出されて現在の三種類となつたもののようである。

寿命は、およそ八年から一〇年である。尾の長くなるのは雄鶏で、尾の長さは、管理によって多少の相違はあるが、一カ

品としても貴重な遺品である。

薬師、阿弥陀像は釈迦像を規範として作られたもののように作柄に酷似したものがあつたが、全体にのびのびしたゆとりのある明るさを感じられる。四国の山中でこうした仏像と出合いができることは、心の安らぎと生の尊厳を覚えるものである。

〈特別天然記念物 土佐のオナガドリ〉

絶滅の危機にある特別天然記念物トキが野生の鳥の代表とすれば、日本鶏の代表は、本県の貴重な観光文化資源「土佐のオナガドリ」である。

日本鶏で天然記念物の指定を受けている鶏は、全国で一七種類あり、そのうち鶏矮鶏、黄矮鶏、地鶏、軍鶏、東天紅鶏、土佐のオナガドリの六種類は本県が主な生息地である。

これらの品種が持つ特徴は、長い時間をかけ、人々が作り出したものである。なかでもオナガドリは、その美しい容姿から、かつては五色鶏とも呼ばれ、鶏の姿形を持ちながら、尾羽根が一〇メートル余にも及ぶ世界的な珍種である。

「生きた芸術品」ともいえる姿と相まって、この鶏にまつわる多くの伝承がある。その起源譚は次のようなものである。

年約七〇センチメートルくらい伸び、換羽のとき抜けないため、年と共に長くなり三年も経てば約二・五メートル程のみことな尾となる。

飼育は、尾を長く伸ばすために、生後一カ年位して長くなる尾を全部抜き取る。尾を傷めず美しく伸ばすため尾が地面につくころ止箱（飼育箱）に入れて飼育する。

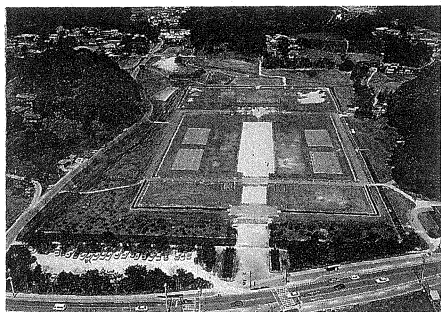
近年、飼育者の中で尾の伸長度や繁殖率の低下が指摘されており、この原因を国の補助事業を導入し調査を実施してきた。

この結果、「原因の一つは、高度の近交によるものと推測され、今後はできるだけ近交を避け、他地区もしくは可能であれば他県からもよい種鶏を導入し、近交退化を予防することが必要である。」とされている。

今後これらのことを踏まえ、飼育関係者や試験研究機関の協力を得て優良品種保存、管理及び技術の向上等に努め伝承していかねばならないと考えている。

(高知県教育委員会文化財保護室長 門田伍朗)

福岡県



大宰府跡の中心をなす政庁跡全景

特別史跡 大宰府跡 特別史跡 王塚古墳



福岡県は、中国大陸・朝鮮半島に近く、早くから外来文化を摂取し、歴史上重要な役割を担ってきた。また、これらの歴史を物語る貴重な各種文化財が多数残されているが、本県を代表する文化財として、「遠の朝廷」と言われた特別史跡大宰府跡と、装飾古墳では奈良県の高松塚古墳とともに特別史跡に指定されている王塚古墳を紹介する。

〈特別史跡 大宰府跡〉

天智天皇二年（六六三）、朝鮮半島の白村江の敗戦により、大和朝廷の北部九州への支配権確立と対朝鮮半島政策のため

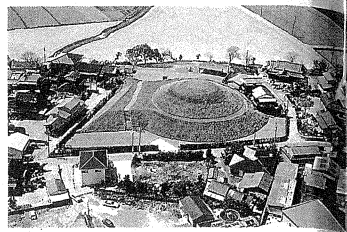
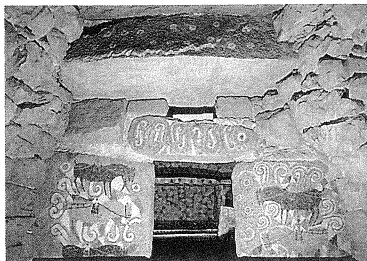
- 大宰府跡の中心、都府楼跡へは西日本鉄道都府楼駅から徒歩10分。水城跡へはJR鹿児島本線水城駅から徒歩5分。大野城跡へは西日本鉄道太宰府駅から徒歩1時間。詳しい問合せは、下記関連展示施設へ。
九州歴史資料館（☎092-923-0404）
大宰府展示館（☎092-922-7811）
太宰府天満宮宝物殿（☎092-922-8225）
観世音寺宝蔵（☎092-922-1811）
- 王塚古墳へは、博多駅からJR篠栗線桂川駅下車、徒歩5分。公開等の詳しい問合せは隣接する下記施設へ。
王塚装飾古墳館（☎0948-65-2900）

筑紫に置かれていた那津官家（福岡市南区三宅付近に比定されている）が、唐・新羅からの侵攻に備えるため現在の太宰府市の都府楼跡に移ったのが、大宰府の起源とされる。大宰府は律令機構のなかで九州全域を管轄する政治・軍事の総督府であり、また、大陸からの来朝使節の饗宴の役割をも持っていた。広義に、大宰府史跡と言えば、特別史跡大宰府跡を中心として、観世音寺境内および子院跡・筑前国分寺跡・大宰府学校院跡・国分瓦窯跡などの国指定史跡と、周辺の大野城跡・水城跡の特別史跡までを含んでいる。これらは太宰府市など四市一町にまたがり、その総面積は九〇〇ヘクタールにも達する広大なものである。ここでは、その全ては紹介できないので、特別史跡に指定されている大宰府跡・水城跡・大野城跡について紹介しよう。

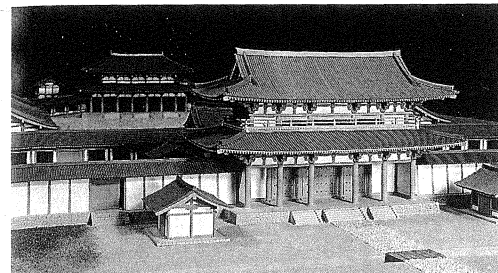
特別史跡大宰府跡は、福岡市の中心から東南方約一二キロメートルの太宰府市に所在する。大宰府跡の中心をなすのが、都府楼跡と地元で言われる政庁跡である。大正一〇年の指定以来、数次の指定拡張をへて、現在の指定面積は約二五ヘクタールである。政庁地区は昭和四三年から福岡県教育委員会による本格的な発掘調査が開始され、大きく三期の建て替えが

福岡県

王塚古墳前室後壁の壁画（再現）



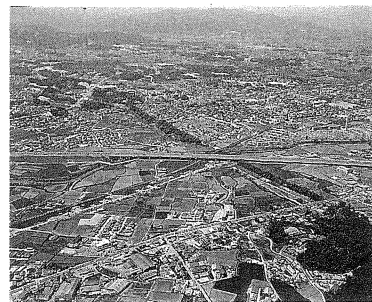
整備後の王塚古墳



政庁復原模型



大野城跡太宰府口城門



水城現況

〈特別史跡 王塚古墳〉
王塚古墳は、福岡県のほぼ中央、嘉穂郡桂川町に所在し、北流して響灘へ注ぐ遠賀川上流東岸の低丘陵南端部に築かれた前方後円墳である。近くには、「魏志倭人伝」に記載された不弥国とも言われる飯塚市立岩遺跡や、国指定史跡の「大分廃寺塔跡」がある。

本古墳は、昭和九年九月三〇日、石炭採掘により陥没した田圃の復旧用土砂採取工事の際、墳丘が削られ横穴式石室の前室右壁隅が偶然に開口し発見された。石室は特異な遺体安置施設を持つ複雑精巧なもので、さらに石室全面に豪華華麗な壁画を有する、わが国装飾古墳中きわめて優れた特徴を持つものとして全国の注目を浴びた。

本古墳は、昭和十二年六月一五日に史跡指定され、昭和二十七年三月二九日には特別史跡となった。また、

出土遺物は、昭和三十一年重要文化財に指定され、京都国立博物館に委託保管されている。

墳丘は前方部の大半は失われ、後円部はかるうじて旧状をとどめている。規模は、復元すると全長八六メートル、後円部径五六メートル、後円部高八メートル程と考えられる。二段築成の墳丘の一部には円礫による葺石があり、円筒埴輪も発見されている。なお、周濠がめぐることが確認されている。

石室は両袖型の複室横穴式石室であり、石室全長は前室入り口が横石で閉塞されているため不明であるが、六・九メートルを測る。玄室は長さ四・五五メートル、幅三メートル、高さ三・七メートルである。前室は幅二・七六メートル、高さ二・一七メートルである。奥壁は石棚を有し、その下面に石屋形が設置されている。この石屋形内には石枕を彫った二体並列の合葬用棺を据え、その前面には上面を浅く窪めた一对の灯明台を立てている。こうした複雑精巧な遺体安置施設を有する古墳は類例を見ない特異なものである。玄室の袖石上部には石を構築し、天井石との間には小窓状の空間を設け、玄室内の様子を観察できるように造られている。本古墳の最大の特徴は赤・緑・黄・黒・

行われていることが確認された。すなわち、第一期は大宰府政庁創建期の掘立柱建物跡群（七世紀後半から八世紀初頭まで）、第二期は朝堂院形式の配置をなす創建期の礎石建物跡群（八世紀初頭から一〇世紀中葉まで）、第三期は朝堂院形式の整備拡充期の礎石群建物（二〇世紀中から一二世紀前半）といった政庁変遷の様子が明らかにされた。また、発掘調査と並行してその成果を基に史跡整備も進

められ、未調査の正殿部分を除き、東西脇殿跡や後殿、回廊跡、門跡、築地跡などを平面的に復原表示している。なお、現在、地表面に露出している礎石群は、天慶四年（九四一）の藤原純友の乱後に再建された第三期の礎石群である。また、政庁の東南部には、玉石溝など遺構の一部がそのまま見られるようにした覆土が架けられ、発掘時の雰囲気が見学できる。

一方、大陸からの侵攻に備えて大宰府を防衛するために築かれたのが、水城と大野城である。『日本書紀』（天智三年）に「筑紫築大堤。貯水、名曰水城」とあり、この大堤こそまさに太宰府市と大野城市の境にある水城跡である。水城跡は大宰府の博多湾側を防御するため平野の最狭部を遮断するように築かれた大土塁である。規模は全長一・二キロメートル、高さ一三メートル、基底部幅八〇メートルの長大な二段築成の土塁で、現在上段土塁のほとんどが鬱蒼とした樹木に被われ、その姿はまさに「横たわれる山」のごとき独特な景観を醸し出している。発掘調査により、木樋や土塁の前面（博多側）に幅六〇メートル程度の大規模な濠が、また、西門跡では、門遺構や古代官道の存在などが確認され、水城の構造が次第に明らかにされつつある。

白の五色を用いて、石室のほぼ全面を埋め尽くして豪華絢爛に描かれた装飾壁画を有する点にあり、その色彩・量は他を圧倒し、まさにわが国装飾古墳中の王者と言っても過言ではない。壁画の内容は、石室上半から天井にかけては、赤色の地に輝く星座のごとく仕上げている。石屋形には三角文、厥手文を多用し、灯明台は靱を中央に据え、周囲を厥手文と双脚輪状文などの幾何学文で飾っている。壁面の腰石には靱と盾を多用している。前室の奥壁に当たる両袖石には、各々赤毛、黒毛の馬二頭が向き合せて描かれ、周囲を厥手文・双脚輪状文などで飾るが、この壁画が本古墳では最も知られた図柄である。

昭和六二年度から桂川町が古墳保存整備工事に取組み、平成五年度に全ての工事を終了したが、これに先立って平成二年度から春、秋各々二日間一般公開し多くの見学者が訪れている。

また、平成六年度には本古墳に隣接した場所に王塚装飾古墳館をオープンさせ、発見当時の石室の再現を中心に、全国の代表的な装飾古墳などを紹介している。

（同課参事補佐兼 文化財保護係長 川述昭人）

大野城も、『日本書紀』によると天智四年に百済の高級官人の指導により築造された山城である。城跡は大宰府跡背後の四王寺山中にあり、昭和七年史跡となり、現在三一七ヘクタールが指定地となっている。標高四一〇メートルを最高所とする馬蹄形の尾根線に全長六・五キロメートルの土塁が城の外郭を形成している。土塁が谷にかかる五か所では自然石を積み上げて石塁とし、特に宇美町側の「百間石垣」は、全長一八〇メートル、現存高四メートルと大規模な石塁で、まさにアーチ状ダムのごときである。また、城門も四か所あり、南端に位置する太宰府口城門は、門礎石が整然と残り最も良く遺構の状況を観察できる。城内では七十余棟の建物跡のうち約半数が発掘調査されている。これら建物跡は掘立柱と礎石があり、そのほとんどが倉庫と考えられている。なお、山中一帯は太宰府自然公園にも指定され、「県民の森」整備事業として自然保護の立場から、発掘調査終了箇所については文化財サイドからの史跡整備が並行して進められ、福岡都市圏の史跡公園として多くの来訪者がある。

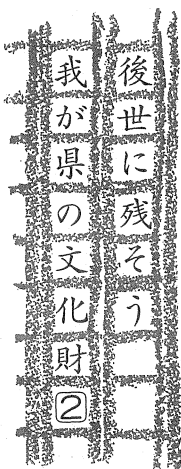
（福岡県教育庁指導第 二 部文化課 参事補佐 新原正典）

佐賀県

（基肄）城跡

基肄城跡は佐賀県三養基郡基山町の北部、背振山地東端に当たる基山（四〇〇メートル）を中心に築かれた我が国最古

特別 史跡 基肄（椽）城跡 名護屋城跡並陣跡



佐賀県下には三つの特別史跡が存在する。

そのうち、吉野ヶ里遺跡はなにかと紹介される機会も多いのであえて触れないで、ここに上げた二つは、その重要性にもかかわらず一般にはこれまで案外知られておらず、しかしながら日本と朝鮮半島との交流史上特筆すべき出来事に深く関わる希有な遺跡として、北部九州に位置する佐賀県の史跡の特色をよく示すものである。

の朝鮮式山城である。

天智二年（六六三）、史上有名な「白村江の戦い」で日本は新羅・唐の連合軍に敗れて朝鮮半島から撤退、一転して国内防備の必要に迫られることになった。その結果、翌天智三年には対馬・壹岐に防人と烽（のろし台）を配置し、太宰府に水城を築いたのを手始めに、九州から畿内にいたる一大防衛線が矢継ぎ早に築かれていくことになる。

基肄城が築かれたのは天智四年である。「日本書紀」にはこの時、百濟からの亡命軍官であった憶礼福留、四比福夫の二名が築城の指揮に当たったと記す。基肄城跡が彼の地の城と通有の特徴を多くもつ

- 基肄城跡へは、JR長崎本線基山駅から車で20分。登山口から頂上までは徒歩20分。詳しい問合せは、基山町教育委員会（☎0942-94-2029）へ。
- 名護屋城跡へは、JR筑肥線唐津駅より昭和バス（名護屋城博物館方面行）で30分、博物館入口で下車。城跡の見学は自由、また年一回本丸跡で新能などの催しも。博物館の主催で「史跡探訪会」なども行われている。詳しい問合せは、名護屋城博物館／☎0955-82-4905 9:00～17:00（入館は16:30まで）月曜休館

のはそのためである。また同じ年には、福岡県の大野城、山口県の長門城（所在地不明）、さらにその後、対馬金田城、讃岐屋島城、大和高安城、肥後鞠智城などが次々に築かれていった。

基肄城はこのような対外的な緊張関係を背景に出現した、特異な歴史的産物である。

城全体の構造は基本的に、谷を取り囲んで一周する長大な土塁と、それに囲まれた四十数棟の礎石建物群とからなる。城域面積は約七〇ヘクタールである。

土塁は総延長約四・四キロメートル。地形に合わせて複雑に屈曲しながら山頂部から麓にかけて尾根上を走行し、谷部を馬蹄形状に取り囲む。断面構造は外側を厳しく切り落として盛土を行い、内側には地元で「車道」と呼ぶ平坦な通路を設けている。おそらく土塁上には柵などの防御施設があったであろう。基肄城を詳しく知ろうと思えば、かなりハードなコースになるが、この「車道」に沿って城内を一周するのが便利である。登り詰めて山頂に立つと、北は博多湾、南は有明海が遠くに望まれ、福岡平野から筑紫平野へ越える、まさに交通の要衝を占める基肄城の重要な役割が見えてくるよう

佐賀県

名護屋城跡の全景



「名護屋城図」をもとにかつての城下町を模型



基肄城南水門跡



基山山頂の尾根を蛇行する土塁

位置する。元々、地元松浦党の一族名護屋氏の垣添城のあった地に築かれたもので、総面積約一七ヘクタールをはかる。全体の縄張りには本丸を中心に二ノ丸、三ノ丸、東出丸、弾正丸、遊撃丸、水手郭、台所丸、山里丸といった各曲輪が渦郭式に構成され、北側のみ堀を巡らせる。門は大手口、搦手口のほかに船出、水手、山里の三か所が設けられている。各曲輪のうち、山里丸は秀吉が築いた城に特徴的なもので、平時の生活に適した私的な空間である。秀吉は二度の在陣中をここで過ごし、能や茶会^{ちやかい}で無聊^{むりょう}を慰めたと伝えられる。また、本丸天守台からの眺望は絶景で、眼下に玄海の島々を見渡し、晴れた日には杵岐、対馬が見える。



復元修理された名護屋城跡山里口

辺境のこの地に城が築かれたのも、良港に恵まれ、なおかつ最短距離で島伝いに渡海するのに便利があったからである。城の普請^{ふしん}、作事^{さくじ}は全国の諸大名に命じて行い、天正一九年(一五九二)の一〇月に着工、わずか五か月ならずで城の主要部分がほぼ完成したという。このすさまじい突貫工事^{とくかんこうじ}ぶりには当時の宣教師ルイス・フロイスも驚きの目を見張り、本国への書簡でその様子を詳しく書き送っている。建物についてはさいわい、『名護屋城図屏風』と呼ばれる絵図が今日に伝わっており、参考になることが多い。名護屋城を中心とて大名の陣屋や城下の風景まで、築城当時の様子が詳しく描かれたもので、本城では各曲輪には数寄屋風の殿舎が建ち並び、本丸には五層の天守がそびえている。

陣跡は約一二〇か所のうち、現在二三か所が本城とともに特別史跡に指定されている。陣跡といっても規模、構造は様々であり、有力大名になるとその規模は優に一つの中世山城に匹敵する規模を誇る。それらが一帯の丘という丘をほとんど全て占拠しているのだから、実に壮観である。徳川、前田、上杉、毛利等をはじめ全国の主だった大名が全て顔を揃え、それぞれ陣屋が比定されている。それぞれ陣屋の構造は、土塁や石塁に囲まれて建物を配するのが一般的である。最も広く調査した堀秀治陣跡^{ほりひであちじんせき}を見ると、三方に門を開けて土塁が丘の上を囲み、その中に能舞台を含めて広大な数寄屋風の礎石建物群が建てられていたことが確認されている。

「文禄慶長の役」はそれまで一寒村にすぎなかった名護屋の地を一躍歴史の表舞台に押し上げ、一〇万人ともいわれる城下町を突如出現させた。しかし、その期間は短く、役が終わると直ちに城は破却され、城下町は夢のように消えてしまった。諸大名の陣屋もたちまち元の原野の中に埋もれてしまう。

名護屋城跡並陣跡は、「文禄慶長の役」の実像を明らかにするだけでなく、戦争の愚劣さと歴史の皮肉をも証明する遺跡である。今後さらに調査、整備が進む中で日本と朝鮮半島との交流の歴史を見直しの場としての使命が課せられている。平成五年秋には待望の県立名護屋城博物館が開館した。

(佐賀県教育庁文化財課 課長補佐 田平徳栄)

な気がする。また、土塁の途中には三、四か所に城門が設けられている。最もよく知られる「南門」は幅二六メートル、高さ八メートルの石塁が谷の入口を塞ぎ、現在山道が通っている脇あたりに門の存在が推定される。石塁の基部に谷水を逃がすための通水口が開けられていることから「南水門」とも呼ばれる。その他、「北帝門」、「東北門」の二門からは大宰府方面に抜けることができ、近年まで基山町側から筑紫野市側への近道に利用されていた。

一方、礎石建物跡は四十数棟が五、六棟ずつおよそ七群に分かれ、多くの場合、急斜面をひな段状に削った上に五、六棟ずつが群在している。今日の基肆城は全山がほとんど植林に覆われている。これまで調査例も建物跡一棟しかなく、ほとんど手付かずの状態にちかいかい。しかし、それだけに遺構はよく保存されており、城内を歩くと礎石群や土塁が林の中にひっそりと残り、かつて当時の国家的規模の動乱、危機感が覆われている。

これらの建物群はいずれも戦時に備えて食糧や兵器を備蓄するための倉庫であり、いわゆる「逃げこみの城」として築かれたであろう基肆城の本来の性格を、最も端的に表すものである。基肆城は九世紀頃までなんらかの形で機能が維持され、兵員五〇〇人規模の基肆団が守備に当たっていた。

これらの建物群は、大部分は瓦葺きであったと考えられる。山頂近くの建物一棟のみ一〇間×五間と飛びぬけて大きく、単独で、しかもあたりを見渡す位置にあることから、司令塔のような特殊な機能を果たしていたと推定される。建物群一帯には布目瓦が多く散布しており、大部分は瓦葺きであったと考えられる。

生々しく伝わってくるような気がする。現在、城域全体の整備計画が進められようとしており、今後の調査、活用にも様々な可能性を秘めた魅力ある遺跡である。

佐賀県東松浦半島の突端、鎮西町にある本城を中心として呼子町、玄海町にまたがり、半径約三キロメートルの圏内に約一二〇か所の陣跡が分布する。規模の点では、全国的にも有数の広大な遺跡群である。

確かに「文禄慶長の役」と豊臣秀吉はよく知られている。しかし名護屋城に関してはこれまでわりと関心が薄く、大概の教科書でも「秀吉は肥前名護屋に城を築いた」と小さく説明を付記する程度にすぎない。初めてこの遺跡を訪れて驚嘆する人が多いのは、実際に遺構の規模、広がりを目の当りにし、そこに秀吉の野望と「狂気」を実感するからである。

本城は標高約九〇メートルの台地上に

ご存じですか？ こんな文化財①①

(長崎県)

重要文化財

銅造如来坐像(黒瀬観音堂)

重要伝統的建造物群保存地区

長崎市東山手・南山手

長崎県の文化に言及するとき、日本の西の果て、いにしえからの海外との交流という事実を抜きにして語ることはできない。

長崎から日本全土へ伝播していった特異な文化は、遣隋使・遣唐使の寄港、対朝鮮貿易、ポルトガル船の来航など、海の彼方の異文化との出会いによって醸成されたものであった。

〈銅造如来坐像(黒瀬観音堂)〉

対馬は長崎県下県郡・上県郡からなり、佐

渡、奄美大島に次いで、国内では三番目に大きな島である。対馬から最も近い本土である福岡県までは、フェリーで一四七kmの距離であるが、韓国の釜山までは、最短距離で五三kmという近さであり、晴れた日には肉眼で朝鮮半島南岸の山々を見ることが可能だ。

この地理的条件が、古くから対馬に大陸や朝鮮半島との交流の窓口としての役割を与え続けてきたのである。

対馬を経由して様々な文物が流入したが、特に仏教と仏教美術は日本の津々浦々にまで浸透していき、日本文化の形成に多大な影響を与えた。

百済から初めて伝えられた朝鮮半島の金銅仏は、三国時代から統一新羅時代、高麗時代と、時代が降るにつれて伝来の密度を増し、対馬島内にも優れた作品が数多く遺っている。

このことは、国境の島・対馬に仏像の伝来ルート「仏像の道」が存在したことを物語っている。

美津島町の黒瀬観音堂に伝わる銅造如来坐像は、統一新羅時代(七



銅造菩薩坐像(おとこがみさま)(右)と
銅造如来坐像(おんながみさま)(左)



世紀(十世紀)の金銅仏中、最も優秀な作品の一つに数えられる。

黒瀬地区は、リアス式海岸の奥深く、波静かな海辺の、人口百人に満たない集落である。如来坐像は、この鄙びた集落の観音堂に安置されていたもので、現在はそのから程近い収蔵庫に収められている。

土地の人々は、この像を「おんながみさま」と呼び、もう一体の「おとこがみさま」(高麗時代の銅造菩薩坐像)とともに、安産の守り神として、篤く信仰してきた。

像高は四三・八cmで、この時代の金銅仏としては大きい方である。右足を外に結跏趺坐する姿で、両手は胸前に挙げて説法の印相を示している。細部に至るまで入念な造りで、三日月形の眉、切れ長の吊り上がった眼は抑揚が強く、艶麗な唇とともに表情の端麗さを表出している。衣文の流麗さはひとときわ目立ち、左肘を覆う衣のひだのまとめ方など、繊細な技巧を駆使したものとなっている。

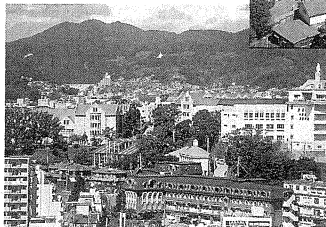
頭部から右腕、胸部までの部分と、左手、両足を含む着衣の部分とを別々に鑄造して組み合わせる構造は極めて珍しく、他に類例のないものである。

この像は、かつて火災に遭い、右膝が大きくくねわがっている。しかし、損傷を補っても余りある、秀抜な出来栄であり、本国の朝鮮半島にもこれ程精緻な作品は遺っていないと言われている。

如来像が対馬にもたらされた由来は定かではない。島内に現存する数多くの渡来仏で、伝世の判明しているものは皆無と言つてよい。交易がもたらしたのは当然のこととして、彼の国の戦火を逃れて渡来した人々の守り本尊



南山手地区を望む



東山手地区を望む



東山手地区から南山手地区を望む

見せ続けている。

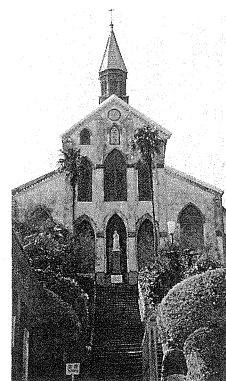
(長崎県教育委員会文化課

管理係長 法澤嘉夫)

〈長崎市東山手・南山手〉

二百有余年にわたる鎖国体制下にあつて、長崎は西洋に開かれた唯一の窓口として、特異な歴史・文化を形成し、日本の近代化に貢献してきたことはよく知られている。

安政の五か国条約が締結された翌年の一八五九年、長崎は横浜や函館とともに貿易港と



国宝大浦天主堂(南山手)

して再出発をした。これまで出島に限定されていた外国人の居留地は東山手・南山手・大浦の三地区に拡大されて、新たな居留地を形成することとなった。東山手地区にはアメリカ・イギリス・フランスなどの各国の領事館や学校、礼拝堂が建てられ、政治・教育・文化の拠点として栄えた。一方南山手地区には洋風住宅や教会、商會などが建ち並び、政治・経済の拠点として重要な役割を果たした。居留地内の洋風建築は明治中期までに付属屋を含めて八百棟近くあったと推定されているが、これらの建物もその後の居留地の廃止、長崎港の衰微、さらには先の戦争や戦後の都市化現象のなかで急速に減少していった。だが最近では、この貴重な伝統的遺産を保存継承し、長崎のまちづくりの中に生かしていくこうとする取り組みが市民や市当局に高まってきている。その具体例が東山手・南山手の伝統的建造物群保存地区、旧英国領事館及び旧香港上海銀行（重要文化財）の保存修理

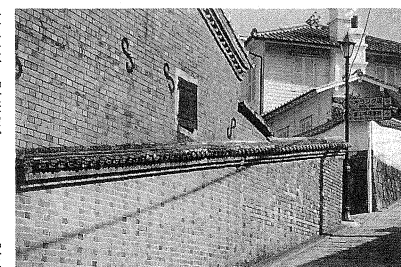
事業などである。これらは今も地域の中に溶けこみ、ふるさと長崎「日本の異国・長崎」の原風景として市民に親しまれている。長崎の洋館を他地区のそれと比較すると、次のような特色が見出せる。

まず長崎の洋館のほとんどが無名の大工棟梁らによって建造された木造洋風建築、もしくは擬洋風建築であるのに対し、横浜などのそれは有名な建築家によって建造された本格的な洋風建築といえる。また、横浜などに現存する洋館は戦災、地震、火災などにより幕末、明治初期のものはわずかであるのに対し、長崎には幕末から明治・大正期のものが数多く現存している。それらの代表的なものを列記すると、現存日本最古の教会である大浦天主堂（国宝）や重要文化財であるグラバー住宅、リンガー住宅、旧羅典神学校などが挙げられる。

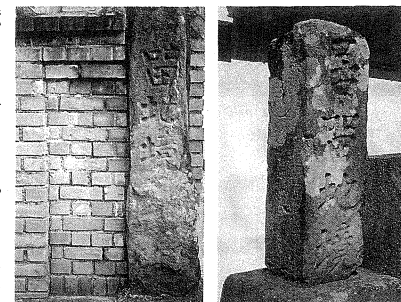
現在も町境として生きている。また地区内には多くの洋館とともにオランダ坂に代表される石畳、石塀、煉瓦塀などの土木遺構がひっそりと周囲に溶けこんでいる。さらに地区内を注意深く観察すると、石畳などと対峙して当時の側溝や下水道が急な斜面に工夫をこらして造られている。

長崎の特異な歴史・文化を今も色濃く遺すこれらの歴史的地区を時間に制約されることなくのんびりと散策されることを勧めたい。石段を数え、側溝をのぞき込み、樹木の間から洋館を見、また急な坂道を歩きながら長崎の港を眺めるのも一興であらう。

（長崎県教育委員会文化課
指導主事 中野靖則）

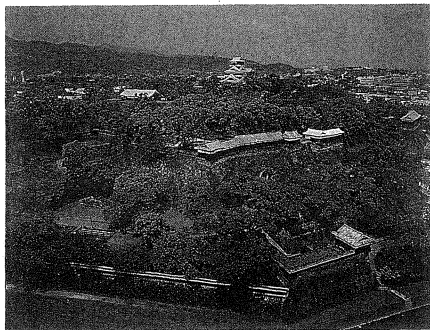


煉瓦塀・煉瓦壁(東山手)



居留地境石標(右 南山手、左 東山手)

熊本県

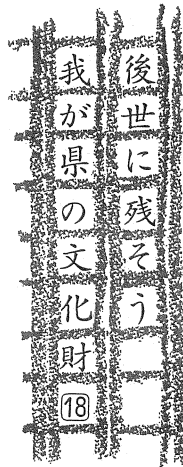


熊本城跡全景（熊本市教育委員会提供）

特別史跡
重要文化財
熊本城跡

重要文化財
熊本城

重要文化財
通潤橋



〈特別史跡 熊本城跡〉

／重要文化財 熊本城

熊本市街地の中央部に雄大な姿を見せるのが熊本城跡である。この付近には中世後末期に現在千葉城・古城と呼ばれる城があり、肥後国衆の一つの拠点的地となっていた。その国衆は天正一五年（一五八七）に一揆を起こし壊滅、責任を問われた佐々成政に代わって、翌年加藤清正が入国した。彼は城をより強固にすべく、千葉城と古城の中間に位置した茶臼山の大改造を計画、慶長六年（一六〇二）より同一二年にかけての工事の結果、今

- 熊本城跡へは、ＪＲ熊本駅から電車、健行で13分、「熊本城前」で下車、徒歩10分。詳しい問い合わせは、熊本市教育委員会文化課（☎096-328-2742）へ。
- 通潤橋へは、ＪＲ熊本駅からバス、浜町行または馬見原行で90分、「中央公民館前」で下車、徒歩5分。または、ＪＲ熊本駅から車で60分。詳しい問い合わせは、矢部町教育委員会（☎0967-72-0444）へ。

日の熊本城跡が誕生した。周囲五・三キロメートル、面積七六万平方キロメートル、坪井川・井芹川を外堀として、自然地形を巧みに利用した城郭配置を行っている。ただ、この地全体と特別史跡の範囲とは一致しない。築城当時、主要な建築物は天守二・櫓四九・櫓門一八・城門二九を数えたという。加藤氏は二代で改易、寛永九年（一六三二）細川忠利が入城、以後明治維新まで細川氏の居城となった。明治四年（一八七二）の廃藩置県後は、鎮西鎮台（同七年に熊本鎮台）となり、明治政府の軍事拠点となった。しかし同一〇年の西南戦争時に大火災上、大小天守をはじめとして、主要建物が焼失した。

城跡は大きく本丸・二ノ丸・西ノ出丸の三つに分かれ、それぞれ空堀や水堀で区切られている。本丸には最高部に大小の天守が置かれ、それを守るように、竹ノ丸・東竹ノ丸・飯田丸・数寄屋丸が配置されており、それぞれに「武者返し」と呼ばれる、上の方が反り返る石垣が組まれている。これらの石垣が幾重にも連なる景観はみごとである。特に竹ノ丸から見た天守の姿は美しい。現在の天守は昭和三五年（一九六〇）に復原されたもので、内部は資料館となっており、細川

ご存じですか? こんな文化財——⑤

(大分県)

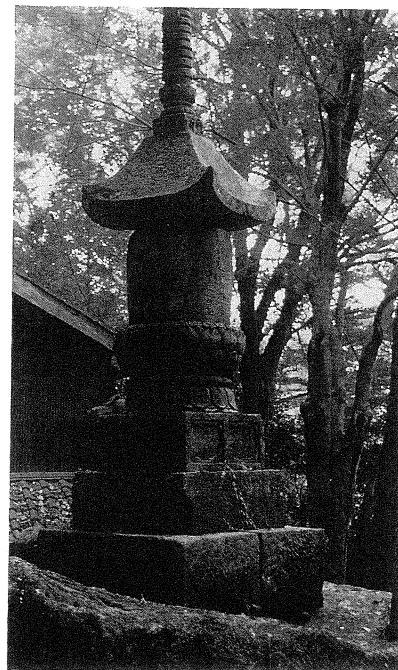
岩戸寺宝塔
(国東塔)重要
文化財

岡 城 跡

史 跡

大分県は、東・北は海に面し、西南は山々が悠揚と迫り、県北の白砂青松の海浜・県南のリアス式海岸・侵蝕されて峻削な山容をみせる耶馬溪溶岩台地・火山灰土による大草原、そして久住山・祖母・傾山などの高い山々など、起伏に富む自然地形は風光明媚で、海の幸・山の幸にも大変恵まれている。そこに生活する人々は自然と見事に融合しながら、さまざまな歴史や人物を生み出してきた。そうした中で、歴史的・文化的遺産は今日に脈々と受け継がれている。

〈見学案内〉
大分県東国東郡国東町大字岩戸寺
大分交通/バス(岩戸寺行) 岩戸寺/バス下車
徒歩10分



岩戸寺宝塔

重要文化財岩戸寺宝塔(国東塔)

岩戸寺宝塔は、東国東郡国東町の天台宗石立山岩戸寺境内にあり、弘安六年(一二八三)の造立になる総高三・二九メートルの極めて繊細・優美な石塔である。

この石塔は、一般的には現在も「国東塔」の呼び名で親しまれている。この「国東塔」が所在する国東半島は、宝塔のほか、五輪塔・宝篋印塔・板碑・層塔など多種多様なものが数多く点散し、しかも質的にもすぐれていることから、石造美術の宝庫と言われている。

昭和五十一年(一九五三年)の調査により、その分布域は隣接する速見郡さらには下毛郡・玖珠郡にも広がりを見せるものの、調査で判明した約五百基のうち、約九〇パーセントが国東半島内に分布していることもわかり、命名の由来を実証することとなった。

通常の石造宝塔は、下から基礎・塔身・笠

相輪の各部からなるが、「国東塔」は基礎と塔身の間に、反花と蓮花座からなる台座を設けていることに特色がある。台座を構成する反花と蓮花座は共に揃ったものと、どちらか一方を欠くものがあるが、いずれにせよ通常の宝塔に比べて華やかさをえるものとなっており、この岩戸寺宝塔の台座は一重複弁で十二弁の反花と三重複弁で十六弁の蓮花座を設け、国東塔の中で最も入念で精緻なものである。

造立の目的は納経・供養・逆修・墓標等が銘文からうかがえるが、国家安穩・仏法興隆など、より普遍的な内容をもつものが多い。

この岩戸寺宝塔は、「国東塔」最古の作品であり、その優美さは全体のバランス、細部の造形美など、いずれをとってみても他に比肩するものを見出し得ない秀作である。

塔身部の銘文に「如法経奉納石塔一基/右志者為當山平安/佛法興隆廣作修善/乃至法界平等利益/……」とあることから、納経により仏法興隆等を願ったことがわかる。

このような丁寧な技工を施した宝塔が生まれた背景には、この地が平安時代後期以降、宇佐八幡信仰と密接な関係を持ちながら、六郷山(国東六郷内の天台系山岳寺院の総称)で開化した濃密な仏教文化の発展がある。全国に誇れる国宝富貴寺大堂、真木大堂の保存

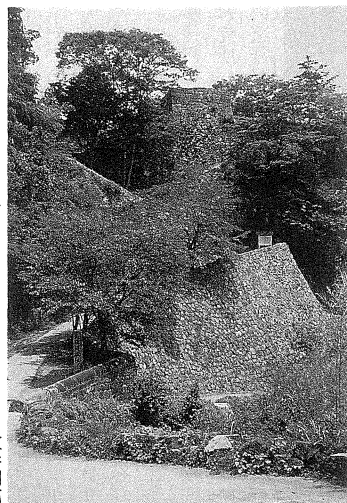
施設に安置する重要文化財の仏像九体、などと同じようにこの宝塔も六郷山文化の一つの象徴である。

史跡岡城跡

竹田市にある岡城跡は、難攻不落の天然の要害、瀧廉太郎作曲の「荒城の月」などのイメージで広く知られている。

城跡の北に稲葉川、南に白滝川を擁し、この両河川が合流する三角形の舌状台地上に城跡があり、現在でも一見して天然の要害を思わせる。その外観が牛が臥した姿に似ていることから臥牛城とも呼ばれた。

文治元年(一一八五)緒方惟栄が築いたのが始まりと伝えられ、その後南北朝時代には志賀氏が拠ったとされるが確証はない。戦国



大手門跡

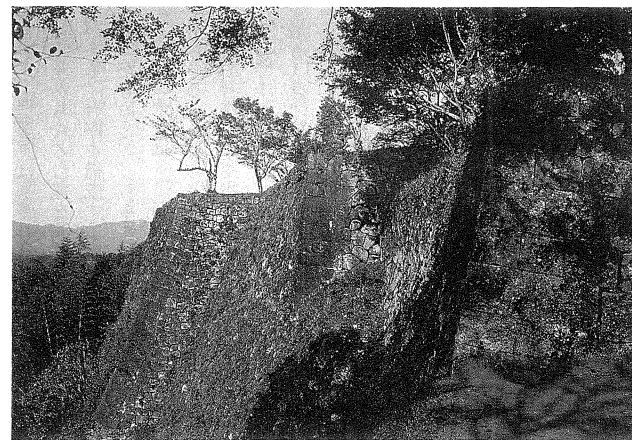


家老屋敷跡整備後



家老屋敷跡発掘状況

〈見学案内〉
大分県竹田市大字竹田
JR豊肥線豊後竹田駅下車徒歩20分



桜馬場から三ノ丸跡の石垣を望む

時代末期には志賀親次が島津軍を岡城でむかえ討ったことが記録に残るが、この時期までの主要城郭は現在の岡城跡の東方にあたる下原口方面と考えられている。

現在の岡城跡の姿となるのは、文禄三年（一五九四）播磨三木城から中川秀成が豊後国直入郡と大野郡のうち六万六千石を与えられて岡の地に入部してからであるが、秀成は入部

後、直ちに城の拡張工事に着手し、中世の大手門であった下原門を搦手とし、旧滑瀬口を大手門とした。なお現在の大手門跡は慶長十三年（一六一三）に築き直したものである。

そのほか、新たに近戸口を開いて三口とし、慶長初年には本丸・二ノ丸・三ノ丸の各曲輪が完成、そして寛文三年（一六六三）西ノ丸の造営が行われ、明治二年の版籍奉還まで十三代二百七十六年間にわたる中川氏の統治が続いた。

先にも述べたように、岡城跡は舌状の台地に位置するため、四方は断崖絶壁で、深い谷にとり囲まれている。そのため、随所に石による開渠・暗渠の導水施設、場所によっては岩盤を掘りくぼめて水路を作るなど、治水に心を砕いた跡がうかがえる。

また、城郭はもとより、城内に配置された家老屋敷・武家屋敷も石垣を築いて敷地を確

保することを余儀なくされたため、一見して石垣が多く、石高に比して城郭の規模を大きく見せている。

その反面、この石垣は地震や暴風雨の被害にあうこともしばしばで、石垣の崩壊・修理は幾度となく繰り返されている。

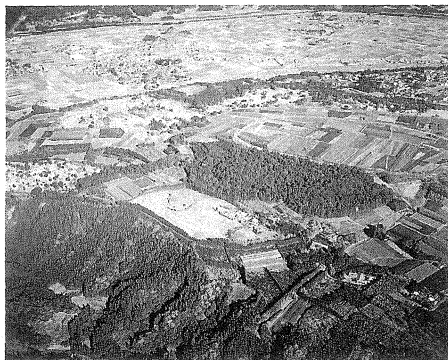
城跡の中核部である本丸・二ノ丸・三ノ丸付近の石垣、中でも桜馬場から見た三ノ丸跡の石垣の造形美はよく知られているが、昭和六十年からの整備により、ほとんど山と化していた西ノ丸一帯の竹木の伐開・発掘調査・整備が進み、昭和五十年代までの岡城跡の姿とは別の新たな顔をもった岡城跡を見ることができるようになった。

ここを訪れる人々は、その壮大な城跡の姿に驚嘆するとともに、この岡城跡の計り知れない魅力に心を引き込まれるという。

竹田市は岡城跡を中心にした歴史を生かしたまちづくりをめざし、画聖田能村竹田が起居した史跡旧竹田荘藩主の祈願所であった重要文化財願成院本堂（愛染堂）、藩主墓所藩迎賓館お客屋敷、楽聖瀧廉太郎旧居などの公有化、保存修理・整備などを精力的に行い、歴史的風情をもった落ち着きのあるまちづくりに取り組んでいる。

（大分県教育庁文化課主幹 秋吉心良）

宮崎県



西都原古墳群(西より)

重要無形
民俗文化財

椎葉神楽

特別史跡

西都原古墳群

後世に残そう
我が県の文化財 ⑧

西都原古墳群は、日向灘の海岸線から西に約一三キロ内陸に入った西都市市街地の西方の台地を中心に分布している。海岸線に近い平野部ではなく、また山間の内陸部でもない、やや内陸という地理的位置は、日向の古墳時代を考える上で重要な意味を持っている。平野部を中心に展開する前方後円墳を盟主とする高塚古墳の分布と、内陸部を中心に展開する南九州独特の墓制である地下式横穴墓の分布が交わる地域、そうした地域にこそ西都原古墳群は成立し得たのである。

陵墓参考地として宮内庁の管理する男狭穂塚、女狭穂塚を除く、南北四・三キロ、東西二・六キロの広範囲に分布する三〇九基が、昭和二十七年に特別史跡として指定されている。その構成の内訳は、前方後円墳二九基、円墳二七九基、方墳一基で、それに地下式横穴墓が加わる。古墳の築造は、標高六〇〜七〇メートルの上位台地、標高二〇〜三〇メートルの中間台地、さらに標高一〇メートルの低地部の三段にわたり展開されている。

▽特別史跡 西都原古墳群

●西都原古墳群へは、宮崎駅から西都市行バスで「営業所」下車、徒歩30分。または、宮崎駅から車で40分。隣接する県立総合博物館西都原資料館を足場に、古墳群は随時見学できる。所要時間は約半日。詳しい問合せは同上資料館へ。

〒881 西都市大字三宅西都原西5670

☎0983-43-1354

9:00~16:30 月曜休館

●椎葉神楽についての詳しい問合せは、椎葉村教育委員会(☎0982-67-3111)へ。

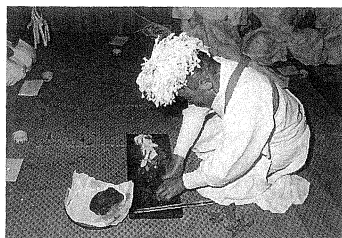
口、東西二・六キロの広範囲に分布する三〇九基が、昭和二十七年に特別史跡として指定されている。その構成の内訳は、前方後円墳二九基、円墳二七九基、方墳一基で、それに地下式横穴墓が加わる。古墳の築造は、標高六〇〜七〇メートルの上位台地、標高二〇〜三〇メートルの中間台地、さらに標高一〇メートルの低地部の三段にわたり展開されている。

上位台地の縁辺に展開する二一九基の古墳群が中心となる群で、昭和四三年に全国第一号の「風土記の丘」として整備された。これらは概ね三群に分けることができ、南北二キロほど離れた地域に各々約一〇〇基の円墳が群集し、その間を結ぶように前方後円墳一六基などが南北に連なり築造されている。このほか、台地の西方に寺原第一支群(前方後円墳三基、円墳一三基)、中間台地の国分寺跡周辺に尾筋支群(前方後円墳五基、円墳一五基)、低地部に鳥子支群(前方後円墳一基、円墳三基など六つの小支群がある。

西都原古墳群の名前は、大正時代に東京・京都両帝国大学など当時の錚々たる学者たちによる我が国初めての本格的な古墳の学術調査が実施されたことによつて、広く知られるようになった。出土し

宮崎県

竹之枝尾「宿借り」



大河内「板起し」

大河内「猪舞」



ている。このような村民の素朴な山の神への信仰は、破れ笠を被り藁蓑を背にまとい杖をついて神楽宿を訪れる山人となつて現れる。山人は山の神であり、神が神楽を舞う宿に歩いてやって来ることを演じている。山人が「御宿申し候」と声を上げると、宿主は「御宿なるまじき候」と断りつつ、山人と宿主の長い問答が交わされる。最後には宿を借りることが

狩猟の村ということもあって、神楽には猪や鹿の肉が奉納されることがよくある。神楽の最初の演目は「板起し」で始まり、これに動物の肉が使われる。俎に小刀を立て櫛の葉や白紙を、唱歌を唱えながら切り刻み、最後は、猪や鹿の肉も切る。切った肉片は串刺しにされ、舞手や村人に配られる。山の神楽の精進潔斎は肉食が許されるのである。と言うよりはむしろ、動物の生肉が神聖な食物として受け入れられていると言える。村内の大河内という集落では、猪舞という神楽がある。二頭のシシの舞が現れるが、一頭は鹿、もう一頭は猪となっている。道化面を着けた二人の猟師が笛の

でき、神酒を酌み交わして終わる。笠を被り、杖をついて宿を訪れる仕草は、遠く石垣島のマングナシの姿を想起させる。山の神を祖先と思ひ、山人というごく身近な存在に仕立て上げたのは、椎葉の民が山のなかで、狩猟や焼畑を生業としているからに外ならない。

音にあわせてシシを追いかけ、木の杖を鉄砲に見立てて撃ちとるという仕草をユーモラスに演じ、見物人の笑いを誘っている。隣接する西部市の銀鏡神楽のシシトギリによく似ており、この地域が狩猟の盛んな地帯であることをうかがわせる。狩猟とともに大切な生業として焼畑耕作がある。人々はその年の総りへの感謝と来年の豊作を祈り、稗や粟、大豆などを盆に載せて撒く舞が多い。散米は悪霊退散の意味も含まれるが、ここでは神送りに散米の手法がとられている。太鼓を立て、厳密には寝かせるのだが、革の上に盆を載せ、米または粟を盛る。人々は神送りの歌を歌い、扇を半開きにして米をすくい上げ高く撒き散らす。こうした所作を何度も繰り返して、一晩に三〇数番の神楽を奉納し終えた安堵感とともに、来年の村内安穩を願い、神楽は終了する。舞そのものも地区によってはスローテンポであったり、激しいものまで実に様々で、太鼓のリズムも隣同士の地区でありながら全く異なることも珍しくない。こうした神楽がいつ頃形成されたのか、素朴な疑問はまだ解決されていない。

(椎葉民俗芸能博物館建設準備室 主任学芸員 永松 敦)



13号前方後円墳より出土した「三角縁神獣鏡」

た埴輪は、その後復元され、重要文化財の子持家形埴輪・舟形埴輪として知られている。この調査では三〇基が対象となり、一三号前方後円墳からは仿製三角縁神獣鏡が出土し、開始期の古墳の一つとして認識されてきた。しかし、現在では、一三号に先行し四世紀後半代には台地縁辺の柄鏡形の前方後円墳から古墳群の形成が開始されたものと考えられている。五世紀前半代で最も革新的な役割を果たしたのが九州一の規模を誇る男狭穂塚、女狭穂塚の成立である。男狭穂塚はその墳形が定型的でないため帆立貝形などの諸説がありいまだ定説を見ないが、楯形の周濠を有する女狭穂塚は三段築成で墳長一七四メートルを計り、仲津山古墳(仲津姫陵)の墳形企画と同一とみられる整った墳形を呈している。

その後、西部原の中心部における前方後円墳の築造は中止され、首長墓の系譜は一ツ瀬川を挟み東に位置する新田原古墳群へと移行する。その間、西部原の台地上に登場するのは南九州独特の地下式横穴墓である。その代表格が一一号円墳の直下に構築された四号地下式横穴墓で、

短甲三領を含む首長級の豊富な副葬品を有し、地下式横穴墓分布圏内最大規模の地下式横穴墓の一つとして知られている。再び、西部原の台地に前方後円墳が築造されるのは六世紀後半代で、南北の各円墳群を代表するように南北に離れて船塚、姫塚の二基が築造されている。そして、最後の首長墓が、前方後円墳の象徴性がうすれた六世紀末から七世紀初頭の鬼の窟古墳である。同古墳は、西部原古墳群唯一の巨石を用いた横穴式石室を主体として、墳丘の周囲に外堤(土塁)を巡らせた全国的にも特異な古墳として知られている。

西部原古墳群は、これまで景観保全が徹底された史跡整備の好例として高く評価されてきた。さらに、本年度(平成七年度)からは大規模遺跡総合整備事業(古代ロマン再生事業)の補助を受け、新しい整備に着手することになった。歴史を体験的に学べる施設の建設と古墳の復元整備などにより、西部原古墳群の新しい魅力を引き出していきたいと考えている。(宮崎県教育庁文化課主査 北郷泰道)

▽重要無形民俗文化財 椎葉神楽
椎葉神楽は毎年一月中旬から二月

にかけて村内二六地区で行われる霜月神楽である。夜を徹して舞われることから夜神楽とも言われるが、椎葉の民にとっては一年の締めくくりという意味を含めて「トシマツリ」の名称で呼び慣わされている。

この神楽は各地区に多種多様な演目、内容を有しているため、全伝承地区を一括して調査し、その内容を世に知らしめるには昭和五十六年から始まる椎葉神楽調査団(団長、本田安次)の入村を待たなければならなかった。調査の結果、椎葉村は他に比類のないほどの芸能の宝庫であることが分かってきたのである。

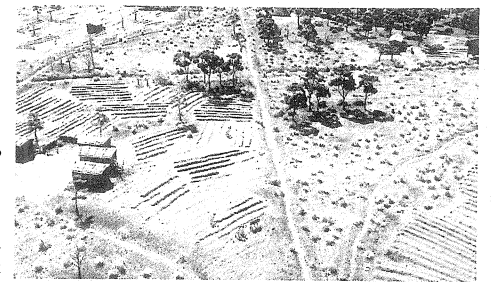
特色の一つとして、唱歌と呼ばれる祭文が極めて古い時代の内容を厳密に伝えていることが掲げられる。唱歌は舞や採物などの由来を語り、問答も含む。「弓の唱歌」では弓を使う天大将軍なる神の出生から生い立ちを語り、弓の誉れを説く。延々と唱歌を語る舞手の姿は神に奉仕する畏敬の念を感じさせるだけではなく、舞手が神懸かりの状態になり神そのものになっていることをうかがわせる。山間僻地の神楽であるだけに、山の神への信仰は平地の民には想像できないほど強く、今も生活のなかに山の神の姿は生き続け

ご存じですか？ こんな文化財①⑥

(鹿児島県)

史跡 指宿橋牟礼川
遺物包含地

一火山灰と戦った人々の集落—



874年3月25日の史跡付近の復元模型

り、その火山灰は、東北地方でも確認されている。

さて、平成五年八月六日の鹿児島市を中心とする水害は記憶に新しいが、この水害の時に、郡山町の国道三号線沿いでは始良カルデラ火砕流堆積物「シラス」の直下から高熱で炭化した樹木根が発見された。その炭化樹木は、火砕流が高温であったことを物語る、鹿児島県内では概ね百メートル近くの厚さで堆積していることも考え合わせると、当時いかに恐ろしいカタストロフィーであったかを容易に想像できる。

鹿児島県には、県都からわずかに四キロメートル離れたところに活火山「桜島」があり、現在もさかんに噴煙を上げている。

そして、その景観は、雄々しくもあり、また、県民の心に深く根ざしている。

反面、この火山によって、鹿児島市をはじめとして、周辺市町では毎年、降灰対策に苦慮している現状がある。

古来、鹿児島県は、多くの噴火履歴がある火山が多数存在している。その中でも、約二万年程前に噴火した始良カルデラは著名である。

このように、鹿児島島の火山と人々の暮らしの関わりは、想像以上に深く、そして、それらの火山活動の履歴を調査することは、とりもなおさず、現在の生活に指針を与える部分もあると考えられるのである。

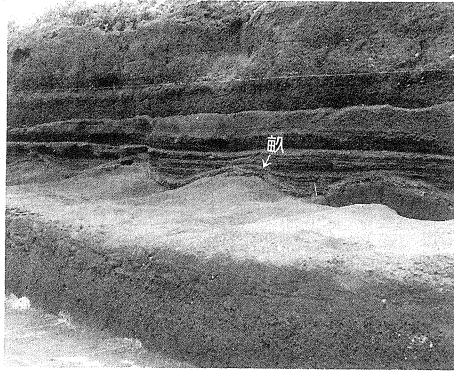
特に、最後の噴火については、「日本三代実録」に災害の詳細な記録があり、記録と、地質学、考古学の成果とほぼ一致していることが判明した。

評価することのできる遺跡である。

指宿橋牟礼川遺物包含地にみる火山災害

指宿橋牟礼川遺物包含地は、現在九州最大の湖である池田湖が約五千年ほど前に噴火し、その火砕流堆積物の上に立地している。

そして、その後、「薩摩富士」で知られる開聞岳が縄文時代後期、縄文時代晩期、弥生時代中期、七世紀後半ごろ、西暦八七四年三月二十五日に噴火し、国指定史跡にも各々の時期の火山灰が堆積しているのである。



火山灰に埋もれた畠の跡

昭和～現代
江戸～明治
鎌倉～室町

874年3月25日に降った開聞岳の火山灰（紫コラ）

畠の畠が作られていた

7世紀後半頃に降った開聞岳の火山灰（青コラ）

古墳時代の地層

このように、鹿児島島の火山と人々の暮らしの関わりは、想像以上に深く、そして、それらの火山活動の履歴を調査することは、とりもなおさず、現在の生活に指針を与える部分もあると考えられるのである。

火山灰の堅さは、方言で「こら」と呼ばれていることにも表現されている。

「こら」とは、「こうら」が訛つたもので、亀のこうらのように堅いという意味で、指宿地方では、この「こら」を耕作のために除去するには非常な労苦を伴う。火山灰の「堅さ」が現代に至る長い期間、当地方の農業の生産性を低く抑え続けていたのである。

この「堅さ」は、災害復旧をしようとするものにとって、致命的な事柄であった。

国指定史跡内には、六世紀から九世紀後半期にかけて築かれた貝塚が発見されているがこの貝塚は、七世紀後半ごろの火山灰の時には、やや薄い火山灰の堆積であったためか火山灰の上下にわたって同じ場所に貝を捨て続

さて、鹿児島県指宿市にある国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地は、火山と人々との関係を知らうとするときに大変有意義な遺跡であると評価されている。

この遺跡は、大正七、八年に濱田耕作博士らによって発掘調査が行われ、火山灰を挟んで上の地層から弥生土器が出土し、下層から縄文土器が出土したことで、これらの土器の年代が異なることを火山灰を利用して確認したのが国で初めての事例であったということが出来る。

現在、考古学では、「火山灰考古学」という分野があり、火山灰を用いて考古学資料の時期の同定を広い範囲で行うなどの実績を上げている。

また、濱田耕作博士は、この遺跡を「先史時代のポンペイあるいはサントリン」と呼んだ。イタリアのポンペイ遺跡は、西暦七九年の火山災害によって埋没した著名なローマ時代の都市であるが、濱田博士はこれと比較し、火山灰が「鍵層」として有益であるばかりではなく、その直下には、過去の「災害」がリアルに横たわっていることを予言していたのである。

もし、「災害」を人類がどのように受け止め、克服、適応していったかを調べることを「災害考古学」と呼ぶならば、指宿橋牟礼川遺物包含地は、そうした視点の出发点として

れていた。

しかし、西暦八七四年の開聞岳噴火に伴う火山灰が五〇センチ近く積もったあとには、貝は捨てられなくなっているのである。

このことは、七世紀から西暦八七四年頃まで開聞岳の噴火があったものの継続して人々の生活があったが、最後の開聞岳の噴火で人々の生活が継続できない状況に陥ったと考えることもできる。

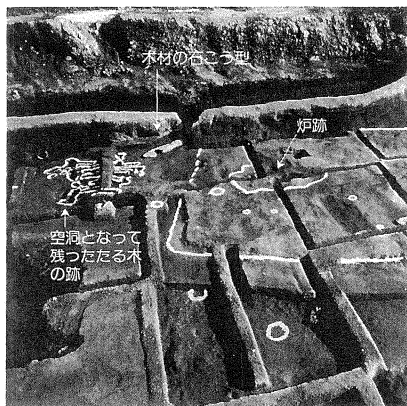
ところで、西暦八七四年の開聞岳噴火については「日本三代実録」の中にその災害について詳しい記述がみられる。

例えば、「沙變成雨」、「河水和沙」等の記述は、降雨や土石流の発生を物語るものとして解釈できるが、発掘調査現場では、こうした記述が概ね正しいことが確認された。

古文獻の中に災害についての記録も残り、かつ発掘調査で当時の災害状況を確認できたものとしては、全国で最も古い事例であると同時に、被災の日付まで知ることのできる遺跡として、被災の顔を見ない遺跡と評価されているのである。

西暦八七四年の開聞岳噴火直前の集落の様子

国指定史跡や周辺地域の発掘調査が進む中で、少しずつ西暦八七四年の開聞岳の噴火直前の橋牟礼川遺跡にあった古代集落の姿が明



らかになりつつある。

これまでに、川、道、島、建物、樹木、柵橋などの跡が発見され、その配置関係や構造などから、当時の国家の縁辺地域の一般集落像が次第に明らかになってきた。

道には、いくつかのバリエーションがあり、当時の一般集落の道路体系や土木技術について明らかにしつつある。路面の土の粒子と周辺の土の粒子を比較してみると、砂利による舗装がされていたことなども判明した。

島では、薄い耕作土を有効に活用するため、畝が立てられ、ここでは、イネや雑穀が栽培されていたことも判明している。

また、掘立柱の建物が建ち、その柱には、枝を落とした丸太が使われていることなども火山灰の中で空洞化した柱の穴に石膏を流し

込んだ結果分かったことである。

さらに、直径が一〇センチメートル以上の樹木のあった部分には、火山灰が入り込んでいないため、どこに木が生えていたかを知ることもできる。

火山灰の中には、木から落ちた葉が封印されており、まだ緑色をした葉が発見されることもある。このような成果を踏まえて、西暦八七四年の橋牟礼川遺跡の集落を模型で復元してみた(24頁写真参照)。

古代「**卑人**」を解く

国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地に住んだ人々は、度重なる火山の噴火などの災害にみまわれると同時に、大きな歴史の中で、つねに揺れ動いていたことも同時に理解することができる。



874年3月25日の火山灰でバックされたシダ類の葉。多量の植物葉片が出土する。

国指定史跡がある薩摩半島では、西暦八〇〇年に班田収授制が施行され、西暦八七四年の災害直前の集落の姿はそれから七十四年後の状況である。

「卑人」という呼称が用いられていたのは概ね七世紀後半から九世紀にかけての時期であるが、平成四年度の国指定史跡中の確認調査の結果、七世紀後半ごろの火山灰を掘りこんだ八世紀代と考えられる堅穴住居群が確認された。

その住居を見てみると、**竈**を持たない住居であり、そこにあつた土器は、古墳時代からの伝統を強く残す土器であつた。

このような発掘調査結果は、「卑人」と呼ばれていた人々は、古墳時代の伝統を強く残す人々であつたと言えるものであつた。

「卑人」と呼ばれた人々はどうのような過程で律令国家の中に組み込まれていくのだろうか。この史跡はどのような問いに答えることができる遺跡であると信じている。

そして、「卑人」と呼ばれていた人々は、単に武勇にたけた勇猛果敢な人々というイメージというより、過酷かつ豊かな自然条件の中で巧みに暮らしていく技術を持ち、そして、火山活動に伴う災害と果敢に戦った人々であつたというイメージを持ち始めている。

(指宿市教育委員会社会教育課主事 下山 寛)

沖縄県

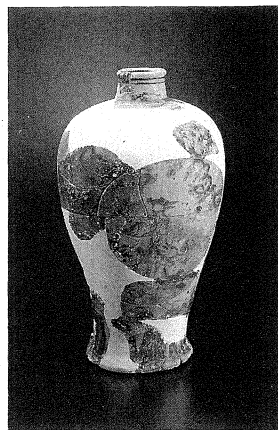
書院等が存在していた。正殿を境に正面側（西側）は政治・行政を中心として表の世界である。正殿の裏側（東側）は御内原と呼ばれ、国王とその家族、城に仕える女官たちの日常生活の場であった。さらに南側にも国王が政務を執る書院、賓客を接待した鎖之間等の建物があった。調査と復元がすすむ首里城

首里城は、戦災による建物の焼失や城壁の破壊、戦後の琉球大学の校舍建設等によって、城内外の景観が大きく変わった。沖縄県では一九七二年の日本復帰か



161本の柱と6万枚の赤瓦が使われている復元された首里城正殿

その中で正殿は最も雄大であり、前面左右に南殿、北殿が相対し、そのまわりに



正殿II期の基壇から出土した染付壺

ら城郭の復元整備をすすめてきた。一九八六年（一月二八日）には沖縄記念公園首里城地区の建設が閣議決定され、首里城の復元に加わるようになった。復帰二〇周年に当たる一九九二年には、歓会門から正殿に至る地区が一部開園し、沖縄文化の象徴として首里城は四十七年ぶりによみがえったのである。

首里城の復元には遺構調査が継続して行われている。これまでの発掘調査から、正殿が一四世紀後半以後、同じ位置で数回にわたって増改築を繰り返していることや、関連する御庭、諸建物、御嶽拜所、城壁等も変遷していることが明らかにになり、琉球の歴史文化の復元もなされつつある。

（沖縄県教育庁文化課史跡整備係長 上原 静）

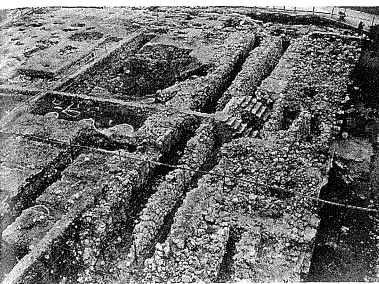
朝薫は、一七七八年に踊奉行に任命された。そして、翌一七九一年、尚敬王（第二尚氏王統一三代目の王）の冊封使を歓迎する重陽の宴で、はじめて組踊が上演された。そのときの演目は「二童敵討」と「執心鐘入」の二番。朝薫はこの二番の他に「銘対子」「女物狂」「孝行の巻」を創作し、その年の冊封使饗応の宴で上演された。これらの作品を「朝薫の五番」と称している。

朝薫の後、田里朝直（一七〇三—

組踊は、せりふを主として歌と踊りで筋を運ぶ楽劇で、高度に様式化された芸能である。組踊は、中国皇帝の詔勅を奉じて来琉する使者・冊封使の饗応のために創作され、士族の子弟たちによって上演された。

組踊をはじめてつくった人は玉城朝薫（一六八四—一七三四）である。朝薫は、二〇歳から四六歳まで都合七回、薩摩や江戸に公務で出かけ、そのかわり本土の芸能を鑑賞したり、演じたりして造詣を深め、自らの芸域を広げた。そして、沖縄土着の芸能や故事を基礎にして、本土の能、狂言、歌舞伎、あるいは中国演劇にヒントを得て創作したのが組踊である。

重要無形文化財 組踊



首里城跡：正殿跡遺構調査

琉球王国の統一と大交易時代
琉球は一三世紀頃、按司と呼ばれる地方領主が各地にグスクを築いて争う城時代を迎えていた。按司は日本、中国などの貿易を背景に、グスクを築き、力をたくわえ、お互いに抗争を繰り返して、やがて按司のなかの按司ともいべき大世の主に成長していった。今帰仁城を居城とする北山、浦添城のちに首里城を拠点とする中山、島添大里城（島

この三山勢力は一四二九年に南部の佐敷からおこった、尚巴志によって統一され、首里城を居城とする琉球王国が誕生する。琉球王国は一四世紀から、明治政府によって解体される一八七九年までの約四五〇年間続くことになる。

尚巴志の樹立した琉球王国は、その後政権交代により尚門を初代とする王統に代わる。前者を第一尚氏王統、後者を第二尚氏王統とよぶ。一三—一五世紀は、琉球王国が東南アジアの国々や中国、朝鮮日本とを結ぶ中継交易の要として栄えた時代であった。交流のあった近隣諸国の

史跡 首里城跡 組踊

●首里城跡は現在、首里城公園として公開されている。首里城公園へは市内路線バス（空港首里城線7番、末古線12番、牧志線13番、泊線14番、石嶺線17番）で、「首里城公園前」下車。
公園内には正殿が復元され、内部の見学も可能。また南殿、北殿ではパネル、美術工芸資料等を展示している。
詳しい問い合わせは、首里管理センターへ。
☎098-886-2020（代）
●組踊に関する詳しい問い合わせは、沖縄県教育庁文化課へ。
☎098-866-2731

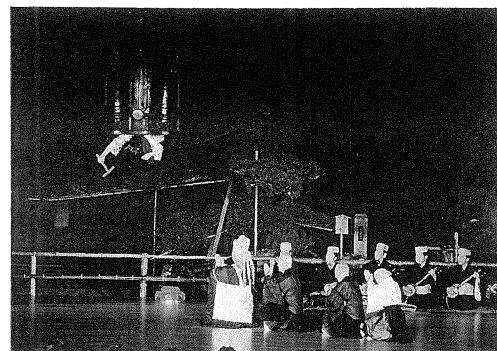
文化の影響を受けながら、首里城を中心として琉球独自の文化がはぐくまれた。

県下最大の城

首里城跡は、県庁所在地の那覇市街東北方の標高七〇—一三五メートルの琉球石灰岩台地に築城されている。北方には旧都浦添城を望み、南西には琉球王国大交易時代の港、那覇港や市街が見渡せる眺望のよい位置にある。

城の構えは、東西南方にある尾根地形を巧みに利用して、急崖になる南側は一重にし、緩斜面をなす北側は二重の城壁をめぐらす二つの郭からなる平山城である。城壁は琉球石灰岩の切石をもって厚く積み上げ、琉球独特の屏風状の曲線で構成されている。その城の規模は東西約四〇〇メートル、南北約二七〇メートル、面積は約四万六、一六七平方メートルの県下最大の城である。城のメインルートは城の西方にあり、綾門大道と呼ばれた約五〇〇メートルの位置に、第一坊門の中山門があった。中山門を通り抜けて約三〇〇メートルの位置に、第二坊門の戦後復元された守礼門がある。外側城壁には大手門（第一城門）の歓会門、そして久慶門、継世門及び木曳門が開き、内側城壁には瑞泉門、淑順門、白銀門などがある。内郭には木造の諸宮殿があった。

沖縄県



組踊「執心鐘入」



組踊「銘刃子」

七七三が「万歳敵討」「義臣物語」「大城崩」「本部大主」の四番の組踊をつくり、以後、「手水の縁」「花売の縁」「大川敵討」「伏山敵討」「久志の若按司」「忠臣身替の巻」「姉妹敵討」「矢蔵の比屋」などの作品が生まれた。現在、七十数演目の作品が確認されている。

組踊の内容をみると、「……敵討と外題のつくもの、つまり〈仇討ち物〉がもっとも多く、全体の約八割を占めている。次に孝行を主題とした〈世話物〉が数演目あり、〈恋愛物〉〈滑稽物〉が二、三演目ずつある。

組踊のテーマは、封建倫理の徳目である〈忠〉〈孝〉であり、それに王府の介在することが強調されている。その要因は、組踊が冊封使の賛応のためにつくられ、上演されたことによる。言い換えれば、組踊が支配者内部で創作され、演じられ、鑑賞されたという事情によるもので、琉球王府の支配理論を組踊のなかに具現して見せたのである。冊封使の賛応が王府主催による国家的な行事であり、儒教の国からの使者をもてなすのに、それがどのような内容になったか、想像にかたくな。作者及び役者は言うに及ばず、三線、箏、笛、胡弓、太鼓の地謡もすべて士族階級の者が行つたのである。

組踊の演出面での特徴は、①台本を備えていること。②せりふの唱え方が役柄や階級によって違うこと。③せりふの声の高さは三線の調絃と同じ高さである。④いったん幕が上がると、演技が終了するまで

幕を下ろさない。⑤演技が時間とともに進行する（過去の場面を演じない）。⑥歌は、三線の前奏なしで歌うことが多い。

などを挙げることができる。

組踊は、明治二年の廃藩置県によって、その継承が危うくなった。しかし、明治期に成立した商業演劇の役者たちによって継承され、沖縄の伝統芸能として定着し、今日に至っている。

昭和四七年五月一日、組踊は国の重要無形文化財に指定された（総合指定）。同時に、伝統組踊保存会会員が保持者に認定され、その後、伝承者養成事業（国庫補助）が実施されている。

ところで、組踊は、その本拠が沖縄県であるという地理的遠隔性から県外での公開機会が少ないために、広く一般への周知度が低い状況であった。組踊の魅力すばらしさを日本全国に知っていただくために、国庫補助による「重要無形文化財等公開事業」の一環として、平成七年度から全国四か所で「組踊」特別鑑賞会を開始した。平成九年度は公開地を二か所増やし、全国六か所において鑑賞会が開催される予定である。

（同主任専門員 大城 學）